

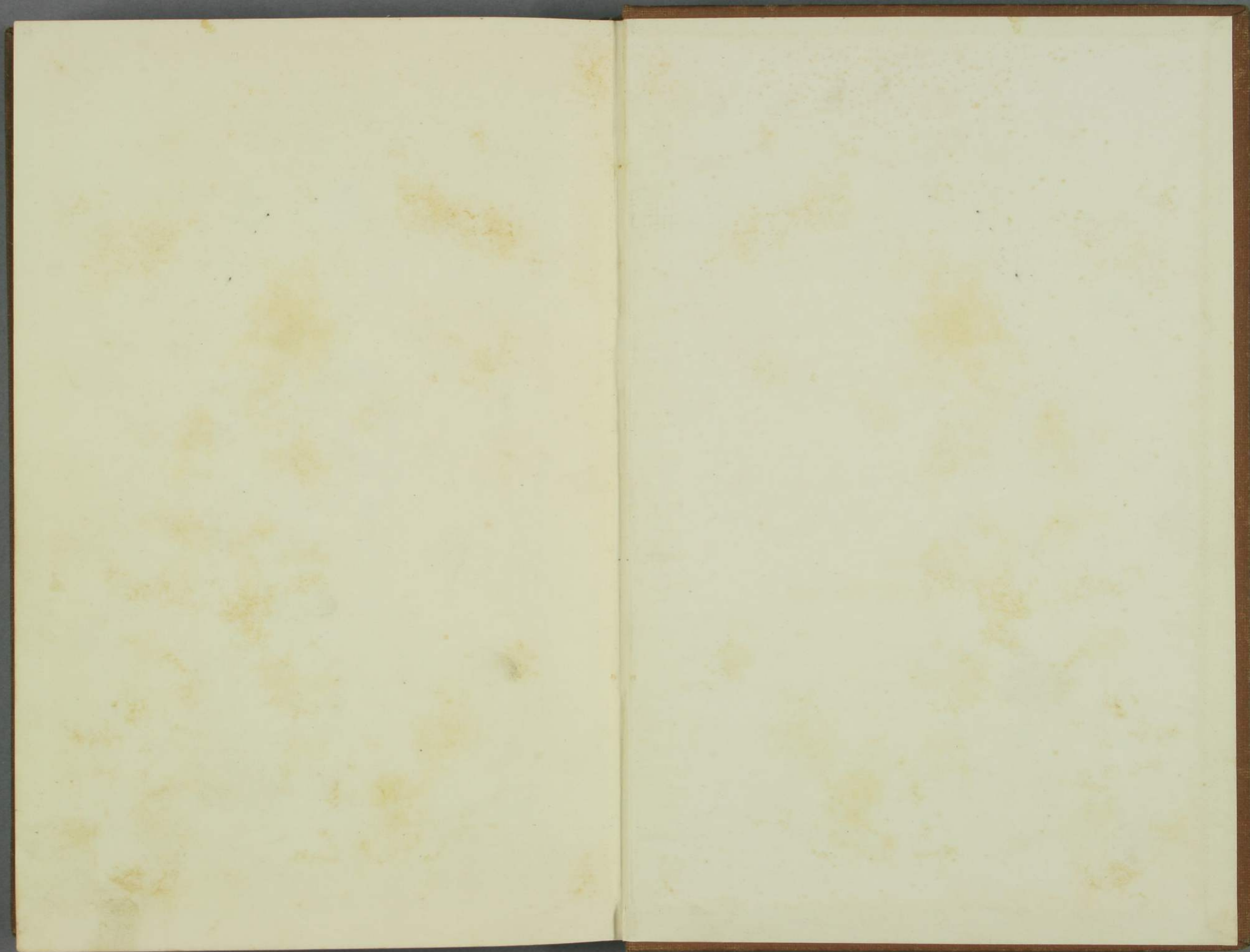


復活

島村抱月著







脚 本  
復 活

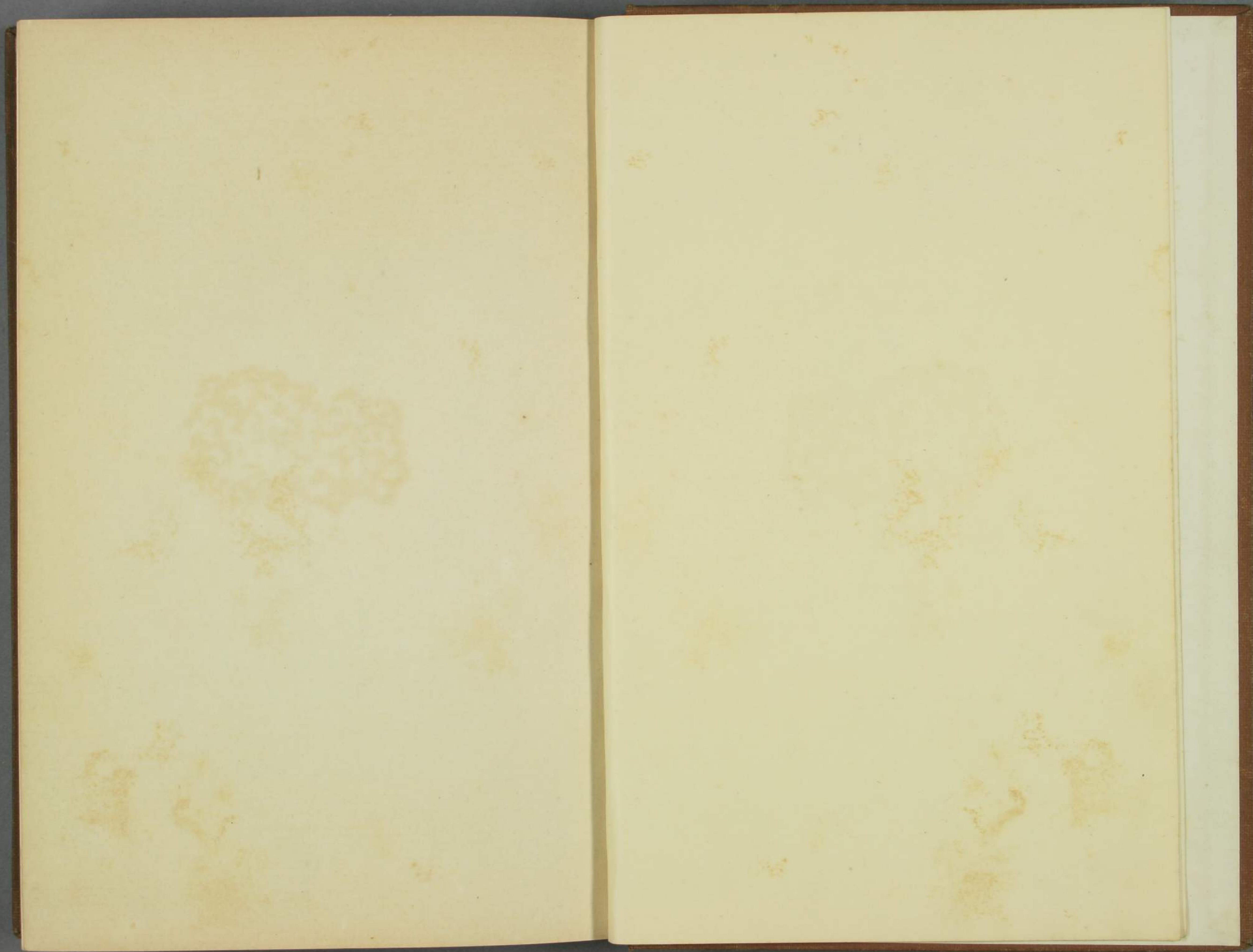


新 潮 社 藏 版

脚 本  
復 活



新 潮 社 藏 版





第一幕

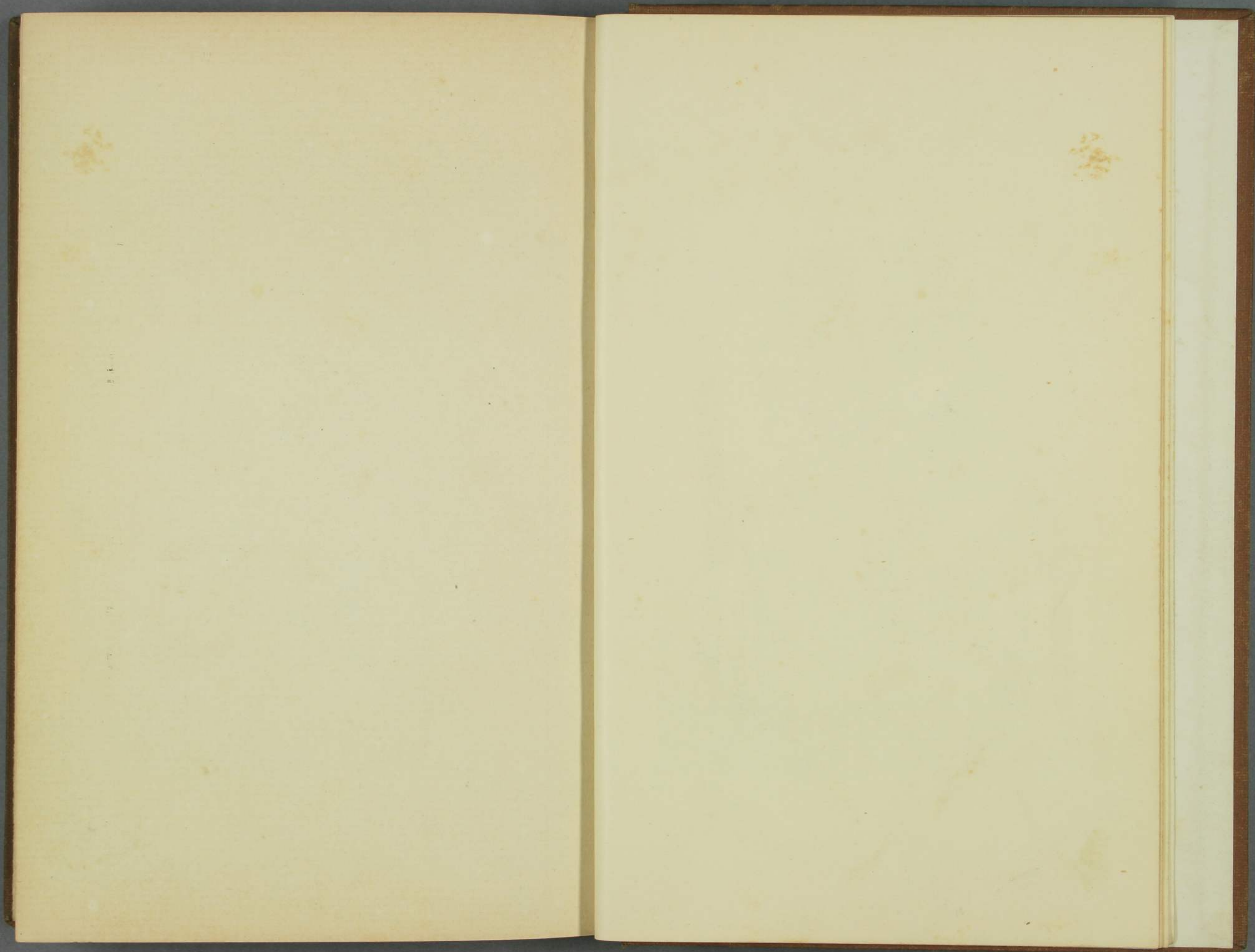
ツリーのネフリユドフとアシユエルのカチユーシヤ





第一幕

ツリーのネフリエドフとアシエルのカチューシヤ





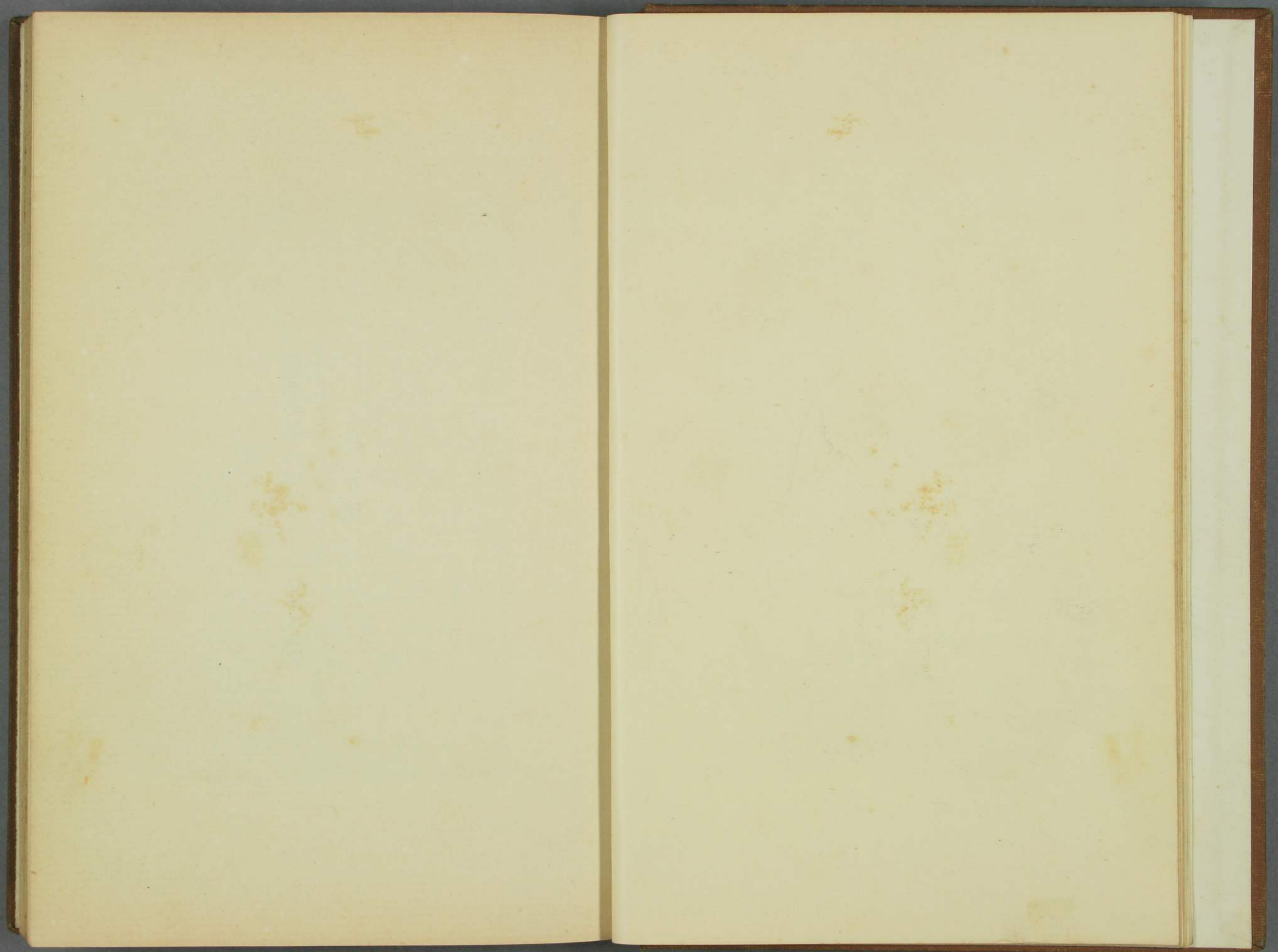
第三幕

ツリーのネフリユドフとアシエルのマスロワ



第三幕

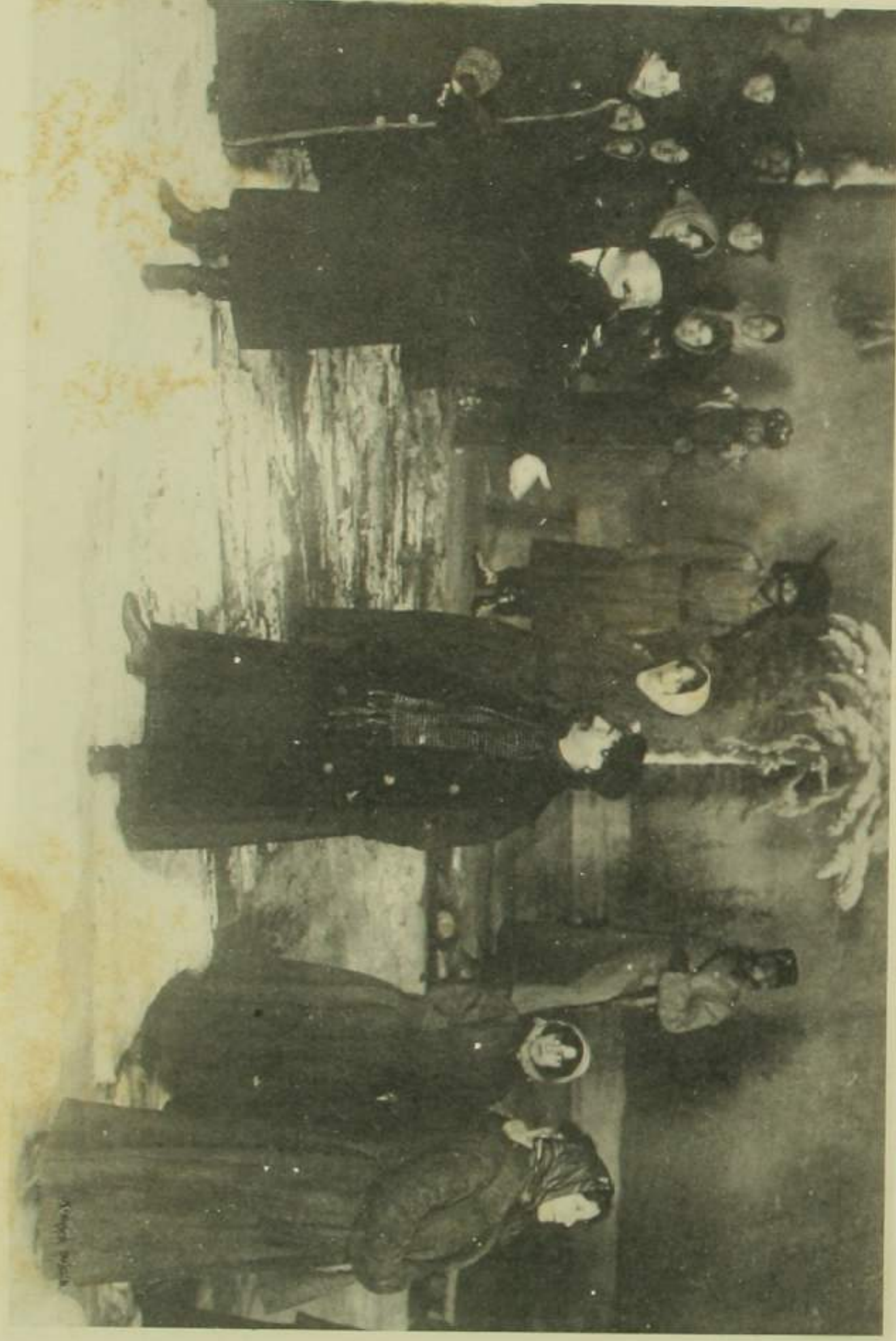
ワリーのキフリニドフとアレンのマスロワ





幕五第

ワロスマのルエシニアとフデュリアネのーリツ



幕五第

ワロスツのルエユツと7ドムリ7ネのーリツ

## 緒言

トルストイの小説『復活』(Resurrection)は千八百九十九年の作で、晩年の作者の一面を代表する名篇である。是れが小説として、藝術として、乃至思想教義の宣傳として、社會組織の批評としての研究は、既に種々の人によつてなされた所であるが、その賛否いづれに拘らず、十九世紀末の最も重大な一著作として、世界を動かしたものであることは言ふを待たない。

1  
小説と劇とは固より方式を異にした藝術であるから、小説の寫すところが其のまゝ劇になることは困難である。たゞ如何なる程



度まで原作の感じ、思想、人物、事件を劇中に生かし得るかといふだけが比較の興味である。従つて小説から脚色した劇の善悪が、原作小説の責任でないことは言ふまでもない。

小説『復活』を劇に脚色したものは、フランスのアンリ、バタイユ (Henry Batille) の作がある。私がそれを見たのは千八百三年にピアボム、ツリー (Beerholm Tree) がロンドンの「陛下座」で其の英譯を演じたときである。

今回の此の脚本はトルストイの原作小説とバタイユの脚本とそれに小改竄を加へたツリーの所演と、三つを本にして更に「藝術座」第三回の上演臺本に適するやう、再脚色を施したもので、大正三年

三月二十六日から六日間帝國劇場で演ずる重なる役割の定まつてゐるは松井須磨子のカチューシャである。

尙小説『復活』の翻譯には英譯にロイス、モード (Loise Mande) のがあり、邦譯に内田魯庵氏がある。

大正三年三月

抱月生

目次

第一幕	.....	五
第二幕	.....	四三
第三幕	.....	七五
第四幕	.....	一二
第五幕	.....	一五三

トルス  
トイ作

# 復活

アンリバタイユ脚色  
島村抱月再脚色

人物

ネフリユドフ(公爵)

シモンソン(國事犯囚)

チホン(老僕)

ファナーリン(辯護士)

陪審長、陪審の商人、同教師、同大佐、同職工組合長、他七人

病院の助手醫、同醫長

看守、押丁、小使、召使、護送兵等

男囚徒若干人

マシロワ「カチユーシヤ」(女囚)  
 フョードシア(女囚)  
 ミシー(コルチャヤーギン侯爵家の令嬢)  
 マリア(國事犯の女囚)  
 一の叔母、二の叔母(ネフリユドフの)  
 老女中、若女中  
 老女囚、綽名大ロシヤ、綽名美人、無言の女等の女囚徒

時代

現時

場所

ロシアの田舎、モスクワ及びシベリア

第一幕

第一場

モスクワ市の貴族ネフリウドフの家の寢室の一部、中央下手に寄つて立派な寢臺、正面上手にカーテンを引いた窓、上手横に扉、又寢臺の前には見事な小卓、其の上に火の點もつた銀の蠟燭皿が載せてある。夜更けの心持。季節は四月。

ネフリウドフは上等の眞白なリンネルの寢衣を着て寢臺の上にすはり伸べた兩脚に羽蒲團をかけたまゝ、寢がけの紙巻煙草を吸ひながら蠟燭の

火で一枚の寫眞を見てゐる。

ネフリ ユドフ

(生あくびをして)

あゝあ。コルチャーギンの夜會もいゝが、

あゝ、どうも立てつゞけにやられちや、たまらない、第一體がつゞかないからなあ。しかし、ミツシーは憎くないね。初めの内あんまり持ちかけやうがしつこいので氣味が悪かつたが、今じや向ふの仕うちも自然になるし、こつちもだんぐなぢんで來たせい、いゝ心持で、お相手が出来るやうになつた。ふゝ、ミツシー！ ミツシー！ (寫眞にちよつと接吻して) 私がお前さんにきまつた返事をしないのは、お前さんが嫌ひだからぢやないのだよ。私には或る主ある女で、少々困つたのがあるのだ。私の地面内の田舎にゐるのだが、どうしても女の方で切れて呉れない。併しこの頃はまた若い士官に岡

惚れして浮れてゐるといふから、今に片づくだらう。田舎女は思ひ切りの悪いくせに浮氣だからね、全くいやになるよ。田舎女と言や、あゝ、もう十年からになるが、カチューシャはどうしたらう？ 長い昔の事だね。あれは復活祭の晩だつた。さうくあれと二人向かひあつて窓に腰をかけてゐると、外は一面に霧のこめた月夜だつた。下の川からは氷の割れる音が聞こえて、遠くの方から復活祭の歌が聞こえる。あの時カチューシャが手拍子を取つて私も一緒に中音で歌を歌つたが、あゝ、もうみんな遠い昔の事だ。明日はまたコルチャーギンへ行つてミツシーのお供で美術館へ行くのかな。あゝ、(また生あくび) 疲れちやつた！ コルチャーギン、田舎貴族の細君の浮氣者、カチューシャ、復活祭の歌、復活祭の歌、あゝ、(寝て枕元の蠟

燭皿を取り蠟燭の火を吹き消す、舞臺暗くなる、ダークチェーンジ)

第二場

舞臺の眞暗な中から復活祭の讚美歌が遠く聞こえて来る其うちにバツと明るくなると田舎の別荘の一室に變つてゐる。正面上手に作りつけの寢牀、カーテンがしぼつてある。下手は大きな窓、そこから月夜に遠く雪の野の景色が見える。三月の復活祭の頃で薄い霧が一面にこめてゐる趣。時々向ふの川の氷の破れる音が聞こえる。室の下手と上手に扉。女中二人、若い方は寢牀を直して居り年取つた方は窓から外を見てゐる。

老女中 もう何時だえ?

若い女中 (枕元の置時計を見て) もう十分で十二時ですよ。

老女中 ぢや、もう十分たつとキリスト様が蘇がへらつしやるんだね——今夜は何ていふ氣候だらう? 明るくつて、それで暖い霧が立つてゐてまるで夏の晩のやうだ。接骨木の花が匂つてゐること!

若い女中 あなたもうおやすみなすつちやどう? あとは私とチホン爺さんとて充分ですよ。

老女中 いゝえ、私はお歸りまで待つてゐて復活祭の接吻をしなくちやならないのだよ。瓶の水だの、タウエルだの石鹸だのをよく見てお置きよ (遠くで此時鐘が鳴る)

若い女中 復活祭の鐘が鳴り出した！

老女中 「キリストは蘇がへり給へり」

若い女中 「キリストは蘇がへり給へり」

(二人一寸抱き合ふ)

若い女中 若旦那はまたすぐ立ちだつていふぢやありませんか？

老女中 あゝさうとも、明日の朝は是非立つてゐらつしやならぬぢやならないのさ。トルコへ戦争にお出でなさるのだよ。その前にちよつとソニヤ叔母さまとラウラ叔母さまに會ひに入らつしやつたのだから、どんな事があつても、それより長く御逗留は出来ないのだ。それやさうと、カチューシャは何うしたえ？

若い女中 あれは奥様方と一緒に馬車で教會のお祭りに行つたのですよ。白い服を着て、赤い簪をさして、めかしこんでさ。

老女中 奥様方と一緒に馬車で？ へん、牛乳屋の私生兒が馬車に乗つてかい？ そして、若旦那さまも御一緒に馬車かえ？

若い女中 いしえ、若旦那はお着きになるとすぐ、服もかへないで馬でゐらつしやいました。此前ゐらつしやつた時よく運動にお乗り遊ばしたあの年とつた方の馬がお好きなのですよ。

老女中 此前たつて、つい一昨年ゐらつしやつたのだが、あの時はまだ大學生の帽子を被つて、書生々々してゐらつしやつたが、今度見ると立派におんななすつた事ねえ。髻なんかはやしてほんとに立派な軍人におんななすつたよ。



若い女中 (窓の方へ行き) 御覽なさい、もうみんな教會から歸ると見えて、提燈が見え出しましたこと！ あの一番早い提燈が二つ、峠度家の方ですよ。

老女中 ぢやお迎に出なくちや……

(二人出て行く、戸の外で)

一の叔母の聲 さあ、お這入り。

二の叔母の聲 氣をつけておあるさよ。

ネフリユドフの聲 はあ、大丈夫です、よくおぼえてゐますから。

(ネフリユドフと二人の叔母入り来る)

一の叔母 之がお前さんのお部屋ですよ。すつかり元のとほりですよ。

活 復  
ネフリユドフ 全く元の通りですね。

二の叔母 あの寢牀も、テーブルも、それから神さまのお像も、みんなそっくり元のまゝだらう？

老女中 (勿體らしく進みよつて) 「キリストは蘇へり玉へり」

ネフリユドフ (微笑して) さう、さう。私はお前をおぼえてゐるよ。

一の叔母 お前笑つてゐて、何もしないね。軍隊へ這入つてから、神さまの事を忘れたのぢやあるまいね？ 復活祭にはお前、上下の隔てなくみんなが抱き合つて接吻するものぢやないか。此の邊ではまだみんな其尊い習慣を守つてゐますよ。

ネフリユドフ さうでしたつけね、なに、忘れやしないのですがね。つひその、あちらにゐるとあんまりやらないものですからね (室内を見まはして心あり

げに) 全く何も變つてゐませんね、一昨年のまゝですね。それから叔母さんたちまでまだ白髪一本も見えませんか！

二の叔母 變つたのはお前ですよ。本統にこんな立派な軍人になつて、ちよつと見分けがつかない程ですよ。何よりも其髯が立派だねえ。

ネフリユドフ また髯ですか？ (笑つて) 私がこゝへ來てから一等よく聞いたのはキリスト様の復活と髯が生えたといふことです。近衛は中尉になるといつを生やすのが規則ですからね、髯は即ち位なのです。

一の叔母 (寢床を見て) お前蒲團を二枚かけたら、寒くはなからうね？

二の叔母 湯たんぼでも入れてあげやうか？

活 復  
ネフリユドフ いゝえ、叔母さま決してそんな御心配には及びません。暖です

く。それよりか、もうよつほど遅いやうですから、あなた方はどうかあやすみ下さい、さ、早くあやすみ下さい、風でもおひきになるといけません。(扉を叩く音がする)

一の叔母 百姓衆がお前に復活祭の接吻をしに來たのですよ(ネフリユドフたちろぐ) 尊い習慣だからしてやつて下さいよ。

ネフリユドフ あはいり！

(一群の農民帽子を手に持ち這入つて來る。先づ神の前に一禮してからネフリユドフに辭儀をする)

15  
農甲 (進み出て) 若旦那さま御無事であ着きなさいましておめでたうござります。

ネフリエドフ やあ、今晚は、お前の家はたしか川向ふだつたね。今晚はお爺

さん。私はいつもお前がたの事を思ひ出してゐたよ。今晚は。君にはたしか子供の折よく驢馬に乗せて貰つたつね。やあ、今晚は、今晚は、今晚は。

甲 若旦那さま、私等みなして復活祭の卵を差上げに参りましたが、斯うして鬱金色に染めた卵でございます、神さまの思召でございますから、どうぞ受けさつしやつて下さいまし。

ネフリエドフ ありがたう、ありがたう、見事な色をした卵だね！ さお前か

ら手初めに接吻して呉れ。

活 復 甲 (袖で口を拭ひながら) 若旦那さま待たつしやつて下さい。斯うして口を綺麗に拭いて置きますから……「キリストは蘇り給へり」

(ネフリエドフの顔に三度接吻する)

ネフリエドフ それからお爺さん。それから

(農民交るく卵を捧げ、口を拭ひ「キリストは蘇りたまへり」と言つて接吻する)

一の叔母 さ、もう、お前は疲れたでせうからおやすみ。

ネフリエドフ はあ、疲れましたから、それでは明日、ちや皆さん、卵をありがたう (農民出て行く、それを戸口まで見送つてあとをしめ) あの大きな口で三度もつゞけさまに接吻された時は、観念はしてゐてもちよつと驚きました。硬い鬚で顔中引つかかれるかと思ひました (大股に室内をあるきながら) 此の机でしたね、私が一昨年卒業論文を書いたのは、あの時の紫インキ

のしみがまだ残つてゐますよ。

二の叔母 さうともお前そつくり昔のまゝにしてあるよ。それはさうとお前は明日立つて戦争へ行くといふことだが、大丈夫だらうかねえ？

ネフリエドフ 大丈夫ですとも、六ヶ月たつとまた休暇を取つてやつて來ますよ。そして昔のやうにいろんな面白い本でも讀んであげませう。

一の叔母 どうかねえ。では今夜は早くおやすみ。寢牀の仕度はいゝか知ら、

(下手の戸口の所へ行つて呼ぶ) カチューシヤ！ カチューシヤ！ ちよつとあつて

カチューシヤの聲 はい。

一の叔母 (戸の外へ向つて) あかね、私の部屋にある上等の石鹼と、それか

ら新しいタオルとを若旦那さまに持つて來ておあげ。それから、チホンに水差を持つてお出でつてね。

カチューシヤの聲 はい、かしてまりました。

(ネフリエドフはカチューシヤの聲に聞耳を立てる)

ネフリエドフ さあ、叔母さん、これでいよゝ今夜はお分かれにませう。

どうぞおやすみなすつて下さい。荷物ですか？ あれは今にチホンが來たら解いて貰ひますから御心配には及びません。どうぞ早くおやすみ下さい、私もすぐ寝ますから。

(二人の叔母の手に接吻する)

二の叔母 てはおやすみ。よく暖かにして、風をひかないやうにおし。おやす

み、おやすみ(顔と兩頬とに三度接吻して上手口から出て行く)

一の叔母 明日の朝は乳入りのコーヒーにして置きますよ。ではおやすみ、おやすみ(之も三度接吻して上手口から出て行く)

ネフリユドフ (椅子に腰をかけたつたりとなつて) あゝ、これでやつと樂になつた! 年寄りといふものは何うしてあゝ諄いのかなあ! カチューシヤは何うしたらう? 早く會つて話して見たいものだ。(扉の方を見るとちやうど叩く音がする) あゝ、カチューシヤか? おはいり! (戸口まで行つて戸をあけると、老僕のチホンが水差を持って入り來たる) なんだ! お前か?

チホン はい、若旦那さま、おめでたうございます。が、あなたさまは、さぞお疲れさまでいらつしやいませう。

(水差を盆に載せたまゝ卓の上に置いて頻りに口を拭ふのを見て)

ネフリユドフ さあゝ、復活祭の接吻をして呉れ (チホン「キリストは蘇り給へり」といつて顔に接吻する) 私も戦地へ行く前に斯うして皆と會へて實に愉快だよ。

チホン わたくし共も、まことにありがたい仕合せでございます。斯うして立派におなり遊ばした若旦那さまにお目にかゝるのでございますもの、長年御奉公の仕甲斐があつたと申すものでございます。

ネフリユドフ こつちではみんな變りはないか?

チホン (行李を解きながら) へえゝ、神様のお蔭で此の爺まで、斯んなにびん／＼して居ります。

ネフリユドフ それからお前の子供も孫も？

チホン はい、みんな息災でございます。それからあの好きなカメラもまだ丈夫でございますし……たゞあの年取つた馬の一つの方、それ御存じでございますか？ 今夜お乗りになつたのでない方が、去年赤痢に取りつかれて死にましてございます。かはいさうな事をいたしました。

ネフリユドフ さうか？ それはかはいさうだなあ。あゝその劔は出して置いて呉れ。それからそのリンネルと化粧箱だけ出して置いて呉れ、ばい。あゝ、その紙入れをお見せ。其の中にはな、一杯、女の手紙だの寫真だのが這入つてゐるのだよ。

活 復

チホン はゝあ、若旦那さま、いけませんぜ、いけませんぜ。成程これは可な

り重うございますな。

ネフリユドフ はゝ、お前等にはさういふ世の中は分らないだらう？ な、

爺や。

チホン 若旦那さまは、きつい色男におんななさいましたな、へゝゝ。

ネフリユドフ 馬鹿を言へ。これが世間並みなのだよ。みんなやるから俺もやるのだ。此の中には或大使館附の武官の妻君から來た手紙があるが、私は其女のために決闘までしたよ。

チホン 其女のために決闘をなさいましたつて？ へえ！ 若旦那さまもゑらい色事師におんななさいましたな。

ネフリユドフ それから此の包と紐とは或る女優が送つて呉れたものだ。

チホン 若旦那さまはまあ、お變り遊ばしましたなあ！ つい一昨年までは、まだほんとうのお書生さまで、よく理屈ばかり言つてゐらつしやいましたか……何とかそれ、イギリスの學者でスペンサーとかあつしやいまして、今に此の御先祖からの大地面も財産も小作人どもに、たゞ呉れてやるやうな事をあつしやつてゐらつしやつたが……まあ、あれよりは今の方がよつぽどよろしうございます。若いときには女の二人や三人おこしらへ遊ばすのは當り前でございます。いやよく立派な旦那さまにありなさいました。斯んな風に軍服を召して、髯をはやして……（ネフリエドフの顔を見ると頻りに一枚の寫眞を見てゐる）若旦那さま、それも女衆の寫眞でございますか？

ネフリエドフ カチユーシヤ！ カチユーシヤ！

チホン （不思議げに覗いて）あ、一昨年の寫眞でございますな。私も寫つて居ります。眞中が若旦那さまで、右が大叔母さま、左がカチユーシヤ其の前に私が坐つてをつて、カメも寫つて居ります。カチユーシヤは全くいゝ娘になりましたな、若旦那さま。

ネフリエドフ あ、いゝ娘になつたが、今夜はどうしたのか、さつぱりやつて來ないね。

チホン まだ御挨拶にも出ませんか？ は、あ、屹度恥かしかつて居るのでございませよ。御主人さまにそんな事があるものか。今に呼んでまゐります。

ネフリエドフ いや、わざ、呼んで來なくてもいゝから、爺やはもうお寝の遅いからな。もう用はないから。

チホン はい、さやうでございますか？ てはもう御用がございませんなら、これでお先へ失禮をいたします（また口を拭いてゐるのを見てネフリユドフ顔を差出すと「キリストは蘇りたまへり」と言つて三度接吻して出て行く。

ネフリユドフ窓の前へ行き外の景色を見てゐる。戸を叩く音）

ネフリユドフ どなた？

カチューシヤの聲 カチューシヤ

ネフリユドフ カチューシヤか、さあはいり。さつさから随分待つてゐたよ。  
（カチューシヤ祭の白の晴着に赤いリボンの簪をさしタウエルと石鹼と花束とを持って這入つて来る）

カチューシヤ 御免なさいな。花を揃へてゐたものですから、少し遅くなりま

してすみません。此のタウエルとね、それから此の匂ひ入りの石鹼は特別に叔母さまからあなたに差上げるのでございますつて。それから此の花は……、つまらない花しか集まらないのですけれど……でも少しは香ひがございませ

わ。

ネフリユドフ（石鹼と花とを両手に持ち交るゝ嗅いで見て）ぢや、此の花はお前が呉れたのだね。どうも、ありがたう、どうも、ありがたう。さあ、まあ、こゝへ来ておかけ。

カチューシヤ（耻ぢらうやうに横を向いて）もう遅うございますから、私、行きますわ。おやすみなさい。

ネフリユドフ いけない〜。來るとすぐ行かないで、少しの間でいゝから話



して行つてお呉れ、私なんだかお前に行かれると淋しくていけないから、そ  
ら、あの枕がまだ袋にはまつてゐないよ。あれを捲へて置いて呉れなくちや。

カチューシヤ あら、まだでしたか？ いけないわね。私、うまく行きませるか  
知ら。

(寢臺の傍へ行き枕を枕袋に入れやうとする。ネフリユドフつかつかと

寄つて後から其頸に接吻する)

カチューシヤ 何をなさいますよ？ (振り放して)……あなた、いけないぢや

ありませんか？ 放して下さいよ、さ、後生ですから放して下さいよ！ い

いえ、よかありません！ よかありません！……(泣く)

活 復  
ネフリユドフ (手を放して)泣いちやいけない！。私が悪かつたから勘忍し

てお呉れ。お前はそんなに私が嫌ひだつたのか？ 私のもつと私を愛してゐ

て呉れると思ひ込んぢやつたのだよ。私が戦地へ行く前にこゝまで来たのは

たゞお前の顔が一目見たかつた許りでだよ。今日私が初めてこゝの家へ着い

た時も、一番にお前が玄關まで出迎へて呉れるか知らと、そればかり楽しみ

にして来て見ると、お前の姿はどこにも見えないぢやないか？ もう此の家

には居ないのだと思つたら胸が一杯になつて了つた。其うちにお前の聲が廊

下の方で聞えたものだから私の心臓は一時に動悸がしはじめて、急に家の中

が明るくなつたやうに思はれたよ。私はそれほど思つてるのに、お前は少

しも私の事を思つて呉れないのだね？

カチューシヤ それは私だつて、思つちやりますけれど、だしぬけに今のやう

な事をなさるのですもの、びつくりしますわ。私だつて、あなたがこゝへお着きになつたと思ふと、ひどく動悸がし出して、顔が火のやうにほてつて來ました。そのために出ることも出來なかつたのですよ(うつむく)

ネフリユドフ 分かつた。だから私たちは、斯うして誰も居ない所でほんとうの話がしたいぢやないか？ 恐いことはないから、あそこへ腰かけてお呉れ。さ、お坐り、私決して亂暴な事はしないから。(背に手をかけて椅子に坐らせる) 恐かないよ。

カチューシヤ もう恐かありませんわ。

ネフリユドフ ね、さうだらう？ で、さつき教會で、儀式のあつた時は、お前、少しも私の方を見なかつたね。なぜさ？

カチューシヤ でもさまりが悪かつたのですもの。

ネフリユドフ あの時お前は全く綺麗だつたよ。一方には燭臺の蠟燭が赤く燃てゐて、戸の傍には銀色の袈裟をかけた坊さんが香爐を手に載せて立つてゐる、その真中に眞白の服を着て眞黒い髪をしてお前が坐つてゐて、ほんとうに美しかつたよ。

カチューシヤ あなたがそんなに見て下すつたのなら、半分嘘にしても嬉しうございますわ。

ネフリユドフ 嘘なことがあるものか！ さうく此寫眞を御覽、お前あの、

一昨年の祭の時の事を覚えてゐるか？

カチューシヤ え、おぼえてゐます。

ネフリユドフ 二人一緒に驅くらをしたね。私がお前の手を引いて、一、二、三で駈け出すと、お前の糊のついた下着かガワ／＼音がしたつけ。

カチューシヤ あらいやだ！ そんな事をおぼえてゐらして？ だけどあなたはすぐ駈け越してお了ひなさいましたわね。

ネフリユドフ あゝ。それからどうしたつけ？

カチューシヤ それから私あの連翹の茂みの後ろへ行つて、駈けることを止めてゐると、

ネフリユドフ 私がそこへ行かうと思つて、其の方へ駈け出すはづみに茨の生えてる溝へ落つちて了つて、

活復  
カチューシヤ えゝ、あの時は私、どうしやうかと思ひましたわ。

ネフリユドフ やつとお前の手につかまつて這ひ上つたが足はづぶ濡れて手には引つ掻き傷が出来てみじめな様だつたね。

カチューシヤ でもとう／＼連翹の木の蔭で二人一緒になりましたわね。

ネフリユドフ あゝ、あの連翹の木の蔭！ お前あれを忘れて？

カチューシヤ いゝえ、私、あなたの傍へよつて、何の氣なしにあなたの服についてる茨を取つてゐると、あなたは何時か私の上にのしかゝつてゐらつしやつて、私の手をきゆつと掴んで接吻なすつたわ。

ネフリユドフ するとお前は驚いて一二間駈け出して、白い花の散りかゝつた連翹の枝を折つて、眞赤になつた顔を扇いでゐたね。

カチューシヤ だつてひどいのですもの。でも、其爲めに、あなたを怨みなん

かしませんでしたわ。

ネフリユドフ あれから私はお前が忘れられなくなつたのだよ。(腰を抱きながら急に立ち上り) お前、何も聞こえないか? あの音は何だらう?

カチューシヤ (耳を澄して) ほ、あれは女中頭のお婆さんが軒をかいてるのですよ。

ネフリユドフ (笑つて) なんだい、女中頭の軒だつて? だが鐘の音か何か聞こえるね、(窓へ行つて明け放す) あ、好い夜だ! 潤んで暖かくて——さあ、こゝへ、私の傍へお出で (二人向ひあつて窓に腰をかける) 春になつたね! あの月の真下のところに割れ目の見えるのは、川の氷だらう? あの音は氷の割れる音だね。

カチューシヤ 春になつたのですね! お聞きなさいよもう一番鶏が鳴いてゐます……氷の碎ける音はあの森の後の川から聞こえて来るのですよ。

ネフリユドフ 實にたまらなくいい景色ぢやないか? 斯うしてお前の手を取つて、此の景色の中をいつまでもあるいてゐたい! おやく、田浦にはまだ人が大勢ゐるやうだね?

カチューシヤ あれは隣り村の人たちが復活祭の火を燃やしに來たのでせう。

ネフリユドフ その前てみんな歌を唄つてるやうだね?

カチューシヤ そしておしまひにお祈りを言ふとそれが一年立たない内になかなかふのださうでございます。

ネフリユドフ お前も一つ歌をお唄ひ。そしてお祈りをして願をかけやうよ。

ね。

カチューシヤ ても、私、できないのですもの。それに叔母さまのお目をさますと大變ですわ。

ネフリエドフ 大丈夫、低い聲で歌つたらいゝぢやないか。お前の名を入れた歌をお歌ひ。

カチューシヤ さうねえ、ぢや歌ひませうか？…(ちよつと考へて軽く手を拍ち)

カチューシヤ かしいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と、

神にねがひをかけましょか

ジ、ジ、ジジビチツチ

ネフリエドフ もう一度、私も歌ふよ。

(二人して手を拍ち低く歌ふ)

ネフリエドフ さあ、歌を唄へば、もう一つ、復活祭の儀式があるだらう？

私とお前と唇に接吻すること、今日はみんな平等なのだから。

カチューシヤ いゝえ、それは父親ばかりですよ、他人は額に接吻するのです。

ネフリエドフ ぢや、この他人は額をお出し。

カチューシヤ はい。

(すなほに額を出す、それを両手に挟んだまゝ接吻せんとして)

ネフリエドフ でもこんなかはいらしい額では、接吻する場所がないよ。だか

ら唇にしてもいいだらう？

カチューシヤ いけないく。額だけ、(避けんとするのを制してちつと眼を見つめ口をつける、女それを唇に受ける。しばらくして目のさめたやうに) ああ、私どうしたのでせう？ いけないく、後生ですから放して下さい。

ネフリユドフ 私はもうお前と此まゝには別れられないよ。

カチューシヤ (涙聲で)でも明日は戦地へお立ちなされるぢやありませんか。またいつお目にかかれるか分からないものを。今夜さらにそんな事をなすつて、残酷ですわ。ああ、私、どうしたらいいでせう？ 私、もう行きませすわ、いいえ、行かなくちやならない、行かなくちやならない。

活 復

ネフリユドフ (しばらく抱きとめやうともがいて)そんなに言ふならお出で！

カチューシヤ 私、やつぱり行かれない行かれない。

(ひしと男にすがる其時再びダーク、チエーンジ)

(女を手放して立つ。女はまた男の胸に頭をあて啜り泣きながら)

第三場

舞臺段々に明るくなると、第一場の場面に戻る、早朝の光が窓かけを透して射し入つて来る。

ネフリユドフは寢臺の上に眠つてゐる下手の扉を叩く音に眼をさます。

ネフリユドフ あゝ、古い夢を見たな。(戸の音に耳を向け)誰れた？

召使 コルチャーギン様から急のお使でございます。お手紙がこゝにございませす。

(寝衣のまゝ起き出て戸口へ行つて手紙を受取り、寢臺に腰をかけてそれを讀む)

ネフリ ユドフ 「あなたさま昨夜は例の輕受合にて今日美術館へ御同道下され候やうのお言葉、楽しみにいたし居り候へど、よくよく考へ候へば今日あなたさまは、陪審官として裁判所へお出でなさる由のいつぞやのお語、萬一其方をお忘れ遊ばしては大へんと存じさつそく文してお知らせ申上候其代り裁判所の方すみ次第私宅へお越し下されたく、御用すみの時刻を見はからひ、私馬車にて裁判所までお迎ひにまゐり申候、あとはお目もじの上、ミシーより」

(讀み了つて手紙をテーブルの上に投げ出し) さうく、今日は裁判所へ行くのだつたな。馬鹿々々しい仕事もあつたものだ。どれ、もう起きやう(ベルを押す)

幕

第 二 幕

スモクワ巡廻裁判所内審議室、中央に一脚の大テーブル、周圍に椅子、  
上手に長椅子、正面中程及び左右の横手に扉。  
小使甲乙テーブルの上を整理してゐる。

小使甲 今日の裁判は何の事件だらう？

小使乙 それ、あの、女郎の毒殺事件よ。知らないのかい？

甲 知らないよ。

乙 あんなに新聞で書き立てゝゐるぢやないか？ マスロワといふ女が客の商



人を毒殺した事件さ。

甲 さうかい。

(此時ドヤ／＼と音して、正面の戸口からネフリユドフを始め十二人の陪審官等が這入つて来る。ネフリユドフは顔色が蒼ざめて、今にも卒倒しさうな様子で、他のものに扶けられて入り来たり、長椅子に倚りかゝる。他の人々は意屈したといふ風に體を伸したり、息をついたり、煙草を吹かしたり、そこらを歩き廻つたりしてゐる。小使出て行く)

陪審の教師 ネフリユドフ公爵、一たいどうなすつたのです？ カチユーシヤと

あつしやいましたね？

陪審の商人 いや、誰でもあゝになると、氣絶したくなりますぜ。拙者なども少

少まゐりました、第一、女が不便でさあ。あれを罪に落とさうとは、検事もひどいや、人情が無いといふものだ。

陪審の退職大佐 では君は、この被告を無罪だと主張するのかね？

商人 無罪さ、勿論無罪さ。あれは大佐、竊盗だの人殺だのと、そんな大それた事の出来る女ぢやござせん。あの眼を見りやあ、分かつてるぢやないか。

大佐 いや、大悪人といふものは、得てあゝいふ無邪氣な容貌をしてゐるものだ。君はいかんよ。被告が女だと、すぐ同情して了ふからいかんよ。

商人 大佐、そいつはいけない。女だから同情するといふ法はない。少なくとも吾輩に取つてはだね、せめて、美人だから同情すると言つて貰ひたいね。マシロワは全く素敵な美人だ。ねえ、ネフリユドフ公爵さうぢやござせんか？

陪審長 さあ諸君、どうか席について審議をお始め下さい。要するに問題は簡単です、本年二十七歳のカテリーナ又はカチューシヤ、マスロワがシベリアの商人スメルコフを、其のダイヤモンド入の指輪及び所持金を竊取する目的で毒殺した。共犯人の一老婆は拘引せられる日に死んで了つた。被告人マスロワは有罪なるか、無罪なるか、といふのであります。

教師 僕は、有罪ではあるが情状酌量すべきものがあると考へます。

商人 いや、吾輩は無罪放免を主張します。あの女は決してそんな悪事を行ひ得るものでござせん、重なる共犯人といふのが死んだ以上、到底動かない證據は上りつこはござせん。罪の疑はしきは何とやら言ふ本文がござせんからな。吾輩は無罪放免を主張します。

大佐 これは怪しからん、他に二人までちやんと共犯人が出てゐるではないか君。彼等は既に竊盗をしたに違ひないと定まつて了つた。さうだとすると、若しマスロワが彼等と共謀しなかつたら、彼等ホテルの傭人どもが金のありかを知らう筈がないではないか？

陪審長 それに被害者の鍵は現にマスロワが預つてゐたのですからな。

教師 それだけでは證據にはなりません。鍵を預つたからといつてホテルの傭人どもが、何も他の合鍵を用ひないとは限りません。

商人 ヒヤ〜。

教師 それから、金を竊んだといふが、此の女はその金を何所にも所持して居りません。境遇が境遇だから、そんな大金を盗んだつて、使ひ道がないので

す。隠す場所も無いのです。

商人 ヒヤ／＼。それが圖星だ。

大佐 併し指輪を持つてゐる。

教師 それはたしかに貰つたのだといふ證據があります。

商人 あの指輪はづぬけて大きいですねえ。被害者の身體検査は何うとか言ひ

ましたね、陪審長？

陪審長 こゝに要點が筆記してあります。丈が六尺五寸。

商人 ふうん、見事な男でげすな。

陪審長 年齢四十歳前後、全身悉く腫物を生じ、皮膚の色は濃い藍色になつ

て紫色の斑が出てゐる。髪の毛は栗毛で、さはるとすぐ脱け落ちる。眼球

は飛び出してゐて、角膜は黒ずんで居り、鼻、耳、口からは薄い鼠色のとろ／＼した液が滲み出てゐる。

ネフリエドフ (長椅子から立ち上り) 陪審長、私は今日或る重大な理由で、あの

被告人の身の上に関し、非常な感動を受け、それがため陪審の席にも居られ

ない程精神が興奮して、皆さんの御厄介になつたのでありますが、マスロワ

が最後に泣き叫んで言つた一言は、神に誓つて偽りでありませぬ。此の事を

真に斷言し得るものは恐らく私一人であらうと信じますが、其の理由を、只

今この席で述べるだけの決心がまだ私につきませぬ、兎に角マスロワは竊盜

を働いたり、人を殺したりする女でないことは、先程のお説の通りです。現

に犯人はもう其罪を白状して死んだではありませんか？それ程の大罪を犯し

たものが、裁判廷に立つて、マスロワのやうな態度でゐられるものでは決してありません。千百の證人や證據物件よりも、このたゞ一つの心の證が大事であります。私はこゝで、天地神明に誓つて、マスロワの辯明に偽りの無いことを繰返して置きます。

陪審長 併しマスロワがコニヤック酒に亞砒酸を混じて其商人に飲ませたといふことを自白して居ります。

大佐 そして亞砒酸は毒藥ですからな。それについて自分の親戚に關する一つの例がありますから、参考のためにお話しませう……

教師 いや例には及びませんから、簡単に願ひます。亞砒酸の毒藥たることは吾々もまた認めて居りますが、マスロワは其商人を少し眠らせる爲だといつ

て、老婆から渡されたのを、信じて飲ませたのです。ですから輕々しくさういふ事を信じた過失の罪はあるかも知れないが、殺意は無かつたものと認めざるを得ません。

大佐 そこがさ、分からない所だよ君。知りませんでした、殺すつもりはありませんでした、と犯人が言へば君はすぐそれを信ずるのかね？ そんな言ひぬけは犯罪人のさまりぢやないか？

ネフリエドフ 成ほどそれは言ひぬけかも知れませんが、がまた眞實かも知れませんが、どちらとも分からない時には、たゞ其の當人について、さういふ事をするものであるか無いかを吾々が直覺で見とほす他はありません、其の心の證が何よりも貴いのです。證據など、いふものは、たゞ物の外部だけしか照す力

はありません。

大佐 だから吾々は吾々の心の證で、有罪だと見とほしたのではありませんか？ 吾々の方がよつほど筋道が立つて居る。

ネフリニドフ それを見とほすには、何よりも其の當人を知つてゐなくちやなりません。マスロワの生ひ立ちから經歷、彼れが今日のやうな悲惨な境遇に陥つたまでの事情を、それも心の底の祕密にまで立ち入つて知つてゐる者でなくしては、正しい直覺は出来ません。

大佐 ふん、ではあなたは何か被告人に關する、祕密を御存じですか？ これ  
は聞きものだ。(立ちかゝる、皆々その方へ向く)

活 復  
ネフリニドフ……(眼をつぶつてゐる)

陪審長 何か特別の祕密を御存じですなら、それを此の席で打ち明けて頂きたいものです。それが被告人のためにも何より利益な事と信じます。こゝで打ち明けになることが出来ないやうな祕密だと、却つて公證の心證に或る私情がまじつてゐるのぢやないかといふ疑ひを起させます。公證の公平を疑ふ材料になるばかりです。さういふ事情なら却つて知らない方が公平な判定が下されませう。

ネフリニドフ は、公平！ 私は事情も知らないで冷やかな心から公平だと思つてゐるものと、事情を知つて同感するため不公平だと呼ばれてゐるものと、どちらが果たして眞の公平であるかを疑ふものです。

陪審長 さういふ御議論は法廷では許しません。

商人 公爵、兎に角その秘密な事情といふのを聞かせて下さい。吾輩は必ず何かそんな事があるのだと信じてゐましたぜ。不公平なんて、そんなべらぼうな事があるのですか、公平々々つて公平面を並べてる連中なんぞ、ありやみんな人情無してさ。だからそんな手合の鼻を明かしてやるために、その秘密の事情てのを、ぶちまけてお丁ひなさい。吾輩は一から十まであなたに同感して。

ネフリユドフ ……(尙答へず)

大佐 ぢやあ、別に秘密の關係も無いものと認める外はありませんね。へつへつ、その方が公爵のためにもいゝやうだ。あんな女と秘密の關係などがあるとなると、ねえ君……

商人 あつたつて結構。憚りながらこゝにござらつしやる御連中でも、しかつめらしい顔はしてゐなさるが、どうだい、あの女を別嬪でないとは言へますまい？ 別嬪だと思へば、もう其の心には秘密の關係が出来たのぢやごわせんか？

陪審長 要するにマスロワの一身に關しては當然、法廷に立合はれる方々は、先刻検事が述べられただけの事情を御承知の事と見るほかはありません。すなはち此女は立派な教育を受けて、フランス語までも解し得るに拘らず、私生兒といふ遺傳で、罪惡の血を生れながら持つてゐたのです。身分ある家に引き取られながら、正當な生活を立てることが出来ないで、其恩に背いて自墮落の行ひをなし、遂に自分から妓樓に身を沈めたのです。そしてお客の商

人をたらしめて、其の所持金と指輪とを巻き上げんがため、鍵を預つて客のホテルに行き、ちやうど犯罪を行はんとする所をホテルの傭人二人に見つけられ、遂に三人共謀して其金を盗み、尙其罪蹟を隠す目的で客を連れ歸つて毒殺したのであります。どうか是れだけの事實に基いて御意見を述べ下さう。

大佐 それから検事はうまい論告をしましたね。斯ういふのが即ちデカダンの標本で、教育ある墮落分子として最も多く社會に害毒を流すものであるから、社會は少しも之れを寛假すべき理由を認めないと、さういふ論告でしたね。

ネフリエドフ 此の女がそれほど悪むべき墮落者であるなら、其の罪は他人にあるのです。當人は却て純潔で正直であつたが爲に墮落させられたに過ぎません、それは到底あなた等に分らない事です。私はたゞあの女の顔にいかにか

れな不幸な運命の影がありくと跡を残してゐるかを見て貰ひたいと思ふばかりです。

教師 ですから、あなたにしか分つてゐない其の哀れな事情をお話しなすつたら如何です？

ネフリエドフ ……(尙答へず)

商人 (側へ行つて) さうなさい。それが一番近道でさあ。え、公爵？

ネフリエドフ (立つて商人の肩に手をかけ) 許して下さい。今はどうも話せません。それといふのも私の卑怯からです。許して下さい、許して下さい。私はたゞ……私はたゞ……私の義務としてこれだけの事を言はなくちやゐられないのです。許して下さい。(椅子の上に倒れかゝる)

陪審長 さあ諸君、議論も盡きたやうですから、マスロワは謀殺犯として有罪なるか無罪なるか、情状酌量の餘地があるか無いか、起立によつて決を取りませう、(無罪有罪の起立を命じ、其數を數へる)その隅の所に着席してゐられる方は初めからどちらとも意志を表明なさらないやうですが、無罪とお考へですか、有罪とお考へですか、どちらにてもお立ち下さう。

陪審の老人職工組合長 人間が人間を捌く権利はありません。

陪審長 陪審官として法廷にお出での上はさうはまゐりません。

組合長 世の中に誰れ一人罪の無いものがありませうか？ 私等は神さまぢやなう。

活 復 陪審長 てはマスロワは有罪ですか？

組合長 ですからすべての罪は赦されなくちやなりません。

陪審長 てはマスロワは無罪ですか？

組合長 無罪です。

陪審長 あやう。それでは採決の結果、二人の多數を以て殺人犯マスロワは有罪と決定しました。

ネフリエドフ (立ち上り)有罪？

商人 かはいさうになあ！

ネフリエドフ それは實に殘刻です！ 諸君、それは殘刻です！ 私はそれを辯明する義務がある！ 何もかも言つて了みますから、どうか諸君お待ち下さ

S……



陪審官

公爵、もう間に合ひません。審議は終つたのですから、採決の結果を尊重なさるやうに希望いたします。さあ、皆さん。

(陪審長が先に立ち正面の戸口から出て行く。)

ネフリユドフ

(一人あとに残つて小使を呼び)陪審長の所へ行つて、ネフリユドフは病氣で列席せられませんかと言つて来て呉れ。それからあの辯護士のファナリーンさんが控室に見えてゐるやうだから、此名刺を渡してちよつとお暇ならこゝまで来て下さいと言つて呉れ。それから、今の事件の宣告が済んだら、其の結果を聞いて来て呉れ。

活復

(小使出て行く、ネフリユドフは心の苦しみに堪へぬ様子で室内をあるいてゐるが、テーブルの上にあつた法律全書を取つて、熱心に繰りはじ

めた。そこへファナリーンといふ名の賣れた辯護士が這入つて来る。)

ファナリーン

やあ、ネフリユドフ公爵、今日は御苦勞さま、いかゞですか、裁判は進行してゐますか？

ネフリユドフ

今ちやうど宣告がある所です。

ファナリーン

あなたは何うしてこゝにゐてゐますか？ 今日の陪審には列席なさらないのですか？ ひどくお顔色が悪いやうですね。どうかなさいましたか？

ネフリユドフ

いや實は君に打ち明けて御相談したい事があるのです。私は此の事件の陪審官たる資格を斷つて、被告マ스로ワのため控訴をし、それでいけなければ上告でも上訴でもして、是非ともあの女の冤罪をそゝいでやりたいと

決心しました。

ファナーリン 大へんな御執心です。併しまだ裁判はさまりませうまい？ 有罪と定まつたのですか？

ネフリニドフ 陪審の方で謀殺犯として有罪に決めて了つたのです。けれどもそれが無實であることは私がよく知つてゐるから、是非救つてやるのが私の義務だと思ふのです。それで手續の御面倒を一つお願いしたいと思ひましてね。

ファナーリン なる程、それは、ほかでもないあなたの事ですから、出来るだけの御盡力はいたしませうが、併し妙ですね。一囚徒のためにそれほどまで熱心におなりなされるといふのは、一體そのマスロワといふ女はもとからお知合ひですか？

ネフリニドフ 知合ひです、或特別な關係を持つた女です。

ファナーリン ふうむ！ あなたがねえ！ いや、併しそんな事は世間にくらもある事ですね。

ネフリニドフ まあ其の先を聞いて呉れたまへ。關係と言つても、さう簡單なおぢやないのだ。今からちやうど十年前、田舎の別荘であの女が小間使をしてゐたころ、私が行き合つて軍隊生活の向ふ見ずから、つい一夜つきりに弄んで了つたのだ。

ファナーリン ふむく。

ネフリニドフ それが元で、女の妊娠となり、流浪となりして、とう／＼今のやうな賣笑婦とまで墮落して了つたのです。

フナーリン さう聞けばかはいさうでもあるが、併しあなたに取つちや、そんな事は何でもありません。若いときには誰れでもやることです。あなた一人に限つた事ぢやない。それに、今日の墮落はあなたが其の最初の誘惑のためだとは言へません。間接の遠因にはなつてゐるかも知れないが、直接の責任はあなたにある譯はありませんね。

ネフリユドフ 世間の人はさう言ふさ。私もさう言つて今まで自分の心を押しつぶしてゐた。併し今日私の良心は目をさまして來たのです。第一の罪惡が無ければ決して第二の罪惡は生まれません。いくら遠い昔の罪惡でも、責任は其の第一歩にあるといふことをつくづく感じました。罪は罪を生んで、段々大きくなつて行く。私のあの過ちがとう／＼斯んな恐ろしい結果になつたかと

思ふと、私はもう此の裁判に立ち合ふ勇氣が無くなりました。

フナーリン て、其の女が冤罪だといふ理由はどこにあるのですか？

ネフリユドフ それは第一が私の心證です。私は一目あれを認めると同時に、すぐ其の顔にそれが讀めたのです。さう思つて見て行くと、此事件のすべての證據はみんな不たしかなものばかりで、結局は人々の推定にすぎないと知れて來ました、斯ういふ境遇に陥るくらゐの女は、罪を犯すのが當然だといふ假定を腹の中になて、それから割出して行く判決に過ぎないのだ。それに比べれば、私は遙によくあの女の境遇の祕密を知つてゐる、その私の推測が誰れの推測よりもたしかでなくてはならない。ですから、君、此の裁判を無効にする正式の手續を考へて下さい。費用などは幾らか／＼つても構はない。

フナーリン 承知しました。併し、どうしてそれが其の女だと分かりました

か？ 女が自身で法廷にそんな身の上ばなしをしたのですか？

ネフリウドフ 初めは私にも分からなかつたが、ふと呼び出された女の顔を見ると、變つた中に不思議と昔のカチューシャといふ小間使に似た所があつて、それが私の眼ざさにちらついてならない。何だか不安心でたまらないから、見ま  
い／＼としてゐても、やつぱり目について離れない。そんな事のあらう筈は  
ないと打ち消して見ても、心の底から／＼とカチューシャの記憶が出て来て、  
だん／＼はつきりとマスロワの顔に其の面影を認められるやうになつたので  
す。考へて見ると、をかしな話だが、昨夜不思議に十年前の事を夢に見まし  
た。今まで忘れやう／＼とつとめてゐた結果、まるで想ひ出しもしなかつた

事を、どうしたはづみかふつと夢に見たのが、今日の記憶を助けたに違ひあ  
りません、初めマスロワと言つてるあひだはまだ半信半疑でゐたが、カチュー  
シャといふ名を言つたので愈それに違ひないと分かつたのです。そして向ふ  
も何度か私の顔を見たが、向ふには私といふことは到底分からなかつたやう  
です。起訴状の朗讀や、検事の論告のたびに、顔を赤くして自分の罪状に驚  
いてゐる様子や、最後にたゞそんな悪い事をした覺はないといつた限り泣きさ  
くづれたさまは、いぢらしくて見てゐられなかつた。そのため私はとう／＼  
卒倒しかけたのです。あゝ、あの最後の言葉を思ひ出すと、今でも體がふる  
へて来る。

フナーリン 分かりました／＼。あなたは 大分感情が興奮してゐるやうだか

ら、早くお歸りになつた方がいゝでせう。

(小使入り來たる)

小使 たゞ今宣告がすみしました。マスロワは徒刑囚としてシベリヤへ移されることになりました。

ネフリユドフ え、シベリヤ?

(立ち上つたまゝ茫然としてゐる。小使去る)

フナーリン 徒刑囚、シベリヤ。ようございませう。早速一件書類を調べて控訴の手續をしてあげませうから明日にもちよつと私の事務所へお出でを願ひます、其のとき萬事御相談をませう。今日は早くお歸りなさるがいゝと思ひます。

ネフリユドフ ありがたう。それでは何分とも願ひます。さやうなら。(フナーリン下手口から去る。ネフリユドフしばらく立ちゐて) カチューシャがシベリヤへ。……それでいよく私のする事も分かつて來た。私もシベリヤまで行かう。シベリヤはおるか、世界の果てまでもついて行つて、あれの體と靈魂とを救つてやらなくちやならない。さうだ、私にはもう財産も地位も用はない、身の累ひになるものは一切棄て、了つて、明日からは體一つになつて過去の罪を贖はなくちやならない。それでこそ、久しくなえてゐた良心に申譯が立つ。あゝさう思ふと何だか急に身が軽くなつて、清々するやうな氣がする。カチューシャ、カチューシャ、決してお前一人をシベリヤへはやらないから堪忍して呉れよ。

(小使下手口から入り來たる)

小使 御婦人のかたが、馬車でお迎ひに見えました。

ネフリニドフ (ぎよつとして) 今日(けふ)は氣分(きぶん)が悪いから失禮(しつれい)しますと言(い)つて呉(く)れ。  
(小使(こつかひ)が出て行く(い)くと入れちがひにミシー盛装(せいさう)して入り來(き)たる)

ミシー 何(ど)うかなすつたの? 手紙(てがみ)であんなにお約束(やくそく)して置(お)いたのに、今日(けふ)は失禮(しつれい)するなんて、ひどいわ。ほんとに御氣分(ごきぶん)が悪いのですか?

ネフリニドフ (慰(なぐさ)めるやうにミシーの手(て)を取(と)つて) ミシーさん堪忍(かんにん)して下さ(くだ)さ、今日(けふ)の裁判(さいばん)が私(わたし)の氣(き)を顛倒(てんたう)させて了(しま)つたのです。今日(けふ)は氣分(きぶん)がわるくて、とても御一緒(ごしよ)に行く(い)くことは出來(で)きません。(じつとミシーの様子(やうす)を見てゐ(み)たが突(つ)き放(はな)すやうにして) 或(ある)はこれ(こ)れきり、永久(えいきう)御一緒(ごしよ)に行く(い)くことは出來(で)ないかも知(し)れ

ません。

ミシー (泣(な)き聲(こゑ)になつて) あら、私(わたし)どうしやうか知ら(し)ら。なぜだ(な)しぬけにそんな事(こと)をおつしやるの? 何(ど)うかなすつたの? 今日(けふ)の裁判(さいばん)でどんな事(こと)があつたのですか、聞(き)かして頂戴(ちやうだい)。

ネフリニドフ まあ、ちよつとこゝへおかけなさい。今日(けふ)は實(じつ)に重大(じゆうだい)な事(こと)があつたのです。お宅(たく)でゆつくり話(はな)せばいいのだが、それももう無駄(むだ)な事(こと)のやうです。すから、こゝでかいつまんで言(い)つて置(お)きます。よく聞(き)いて置(お)いて下さ(くだ)さ。

ミシー (段々(だんだん)眞面目(まじめ)になつて) 何(なん)でせう?

ネフリニドフ 私(わたし)はね、今(いま)までまだあなたと公然(こうぜん)結婚(けっこん)の約束(やくそく)をした事(こと)はないが、その前(まへ)に斯(か)う言(い)つたらあなたはどうします? —— 私(わたし)は決(けつ)して清淨(しやうじやう)無垢(むく)の人間(にんげん)

ぢやないと、さう言つたら？

ミシー 別に何とも思やしませんわ。何をおつしやるのだなう、ぐらゐにしか思やしません。

ネフリウドフ 私の過去には或る大きな罪惡があります。それを今いよく贖はなくちやならないやうになつたのです。それを贖はない内は私は決して無垢の人間ぢやありません。

ミシー ぢやそれを贖つたらいゝぢやありませんか？ 私どんな事だつて、あなたの爲ならお手傳ひしますわ。

ネフリウドフ それを贖ふためには、あなたと此の上の御交際は出来ないのです。あなたのお家とも是れきりになる他はありません。私は明日から、地位

も財産もない、貧乏な平民になつて了ひます。

ミシー まあ、そんな大變な事になるのですか？ 一體その罪惡といふのは何でせう？ 聞かせて下さいな？

ネフリウドフ それは私が過去の、男の生涯です、それだけ言つて置けばいいでせう。

ミシー 男の生涯！

ネフリウドフ あなたはまだ年が少ないから、此のうへ打ち明けて聞かすことは出来ませんが、私は其罪を贖ふために、囚徒の女と結婚するかも知れません。ミシー まあ、どうかしてゐらつしやるのね？

ネフリウドフ どうもしちややめません、本當の事を言つてゐるのです？

ミシー ぢや。まあ！ あなたは私をだましてゐらつしやつたのですね？

ネフリユドフ だました譯ぢや決してありませんが今までは大して悪いとも思はなかつた事が、今日の裁判ではじめて恐ろしい事だと分かつたのです。てすから此のうへあなたと御一緒にゐては、それこそあなたをだます事になります。どうか今までの事はあれきりにして忘れて下さい。お頼みです。

ミシー あゝ、あなたは！ (蒼白くなつて) もう澤山です、もう澤山です！

分かりました。どうか御自由になすつて下さい。私もう歸りますわ。お母さまが待つてゐらつしやる筈だから……さやうなら。

(ミシー出て行く。ネフリユドフ見送つて立つてゐる)

幕

## 第 三 幕

モスクワ監獄の女囚室の一、正面中央に大格子窓、其奥は薄暗い室と假定する。格子窓の上手に大扉。其横手に格子窓、下手横に鐵の小さい扉。室内には隅に寄せてベンチや粗末な寢臺や木箱が置いてある。遅い午後。女囚三四人マ스로ワを取巻いて騒いでゐる。

大ロシヤ(と諱名せられた女) (窓から外を見て) やい、そこにゐる爺い、てめえ、もう濟んだのかい？

老女囚 だまれたら！ 業つくばりめ。お祈りの邪魔になるぢやあないか？



大ロシヤ 何だと？ 牢に這入りやがつて、お祈りも神さまもあるかい？ 大

腸婆あめ。

老女囚 今に見てゐるよ、あたしが、何うするか。(神の像の前に膝をついて)

お救ひのマリアさま、どうか私たちをお守り下さい。そしてあの大ロシヤめを足腰の立たない目にあはせてやつて下さい。

美人(と綽名せられた女) ほんとに、もう澤山だよ。あの肺病やみは奥でゴホ

くやつてゐるし、大ロシヤは悪たいのつきどほし、お婆さんはグシャクシャお念佛ばかり言つてゐて、うるさくてくしゃやうがない。

大ロシヤ (尙窓の外へ) さうだよ爺 私窩子だよ、モスクワの私窩子だよ。若

活 復

くて綺麗ですよ……羨ましくはないかい？

美人 一體誰れと話してゐるんだ？ (覗いて見て) いやだ！ あの禿ちよろの、

狎ころ親爺とだよ！ 呆れつちまふよ。

看守 (下手口から入つて来る) くら、静にしないか？ 大ロシヤ、窓の外へ何を

言つてる？ 窓を離れなさい、窓を離れなさい。

大ロシヤ はい。小言を喰ふのはいつも私ばかりよ。

看守 お前の聲が一番大きいからだ。

大ロシヤ あの大腸婆さんだつて、随分大きな聲をしますわ。

老女囚 餘計な事を喋るない。自分が叱られやがつたものだから、小言の相棒をこしらへやうと思やがつて。看守さま、此の檻房で暴れるのはあいつ一人でございますよ。こつびどく喰はしてやつておくんないまし。

大ロシヤ 何だこの婆あめ。

看守 こらく。二人ともそのさまは何だ？

静にしないと、またひどい目に

逢ふぞ。みんな仕事でもしてゐろ。

(マ스로ワは正面窓下のベンチに腰をかけ、両手に顔を埋めたまゝ、初めから何も言はないでゐる。フョードシアが、之も無言で其傍で編物をしてゐる。老女囚は床にすはつて縫物をしはじめ、大ロシヤ、美人等はそこらにぐつたり腰をかけてゐる。一人の無言の女は、始終室の中を端から端へ行つたり來たりしてゐたが、此時寢床の上に向ふむきに寝て了ふ。舞臺しばらく森となる。看守出て行く)

活 復

フョードシア (マ스로ワに) お前さん、まだ泣いてるの？ ねえ、私、これか

らお前さんの事を姉さんと言はせて頂戴な。お湯を貰つて來てあげませうか？ 其の巻バンでも喰べたらどう？ 随分お腹がすいたでせう？

美人 この人がシベリヤへ流されやうとは、全く思はなかつたよ。無罪放免で、お金でも貰つて歸つて來るだらうと思つてゐたのさ。

フョードシア 一たい何年くらゐ向ふに居ればいゝのだらう？

大ロシヤ 二十年ていふぢやないか。

フョードシア 二十年？ まあ！ そのあひだには死んぢまうわねえ。

大ロシヤ 死ぬとも。シベリヤへ行きや、大ていの奴は二年か三年てくたばつて了ふさうだよ。

フョードシア (すゝり泣きながら) 私、死ぬまで姉さんの傍は離れないわ。

老女囚 それだから私が言はないことぢやない。いゝ辯護士を頼んで、うまく言ひぬけなくちや駄目だつて。

マスロワ (顔を上げて) あゝ、もう何も言つてお呉れてない。シベリヤだつて何だつて構ふものか。行けといふなら、何所へでも行くさ、シベリヤでもサガレンでも。私一人、此の世にゐるのがそんなに邪魔なら、いつでも來て殺すがいい、縛り首にでもするがいい。

老女囚 だつてお前、言ひぬけられるだけは言ひぬけなくちや嘘だよ。

マスロワ 言ひぬけるつて、私には、言ひぬけることも何もありません。私や、何もしやしないのだよ。たゞ私がこんな商賣をしてるばかりに、みんなて、よつてたかつて私を罪人におとしちやつたのだよ。だから私

もうあきらめちやつた。こんな體になつたのが私の不運だよ。

老女囚 世間の奴ら、ほんとに憎いつちやない。みんな大悪人の癖に大きな面をしてやがつて、こちと等のやうな弱いものが、何かするとすぐ罪人呼ばりをしやあがる。こちと等の方がよつほど善人だ。

大ロシヤ 全くさうだよ。

美人 正直なものが馬鹿を見るんだよ。

老女囚 あゝあ。お縫り申すのは神様ばかりだ。(また聖像の前に行つて) お救ひのマリヤさま、どうぞ私どもをお守り下さい。

大ロシヤ およしよ、馬鹿らし。

マスロワ 私たちの神さまは、もう疾づくに居なくなつたのだねえ！ (次の臺

詞のあひだ、マスロフはそつと奥の室へ這入つて行く)

**老女囚** 何がさ、お前。神さまがお出でなさらなきや、此世は全くの闇だ。せめて神さまお一人をたよりに、私たちが生きて行けるのぢやないか？ 神さまのお心に背いちや、私たちがだつて何も出来やしない。

**大ロシヤ** もう何も出来ないぢやないか？ こんな所へ来ちやあ、生きてるも死んでるも同じことだ。神さまに守つてもらつてる奴が牢屋へ来るかい。

**老女囚** だから世間が悪いといふぢやあないか？ 手前だつて、神さまのお心に背いたためにこんな所へ来たとは思つてゐない？

**大ロシヤ** 私は世の中に神さまも何も居ないと思つてゐるよ。甥が間違つた召集で徴兵に取られやうとした時、村中のものが集つて巡査に手向ひしたのを、

現在伯母の私がどうして黙つて見てゐられるかい。私は飛び出して、甥を乗せた馬の鼻づらを押へて、巡査を刎ね飛ばしてやつた。それが悪いと言つてこんな牢屋へ入れやがつたのぢやないか。神さまがほんとうに居たら、こんな無法な真似をさせて黙つて見てゐるだらうか？

**老女囚** さう言や、私だつて、二度目の亭主の奴が、爺の癖に私の連れ子の阿魔と巫山戯た真似をしゃあがつて、あんまり情ないからぶつた切つてやつたのさ。どつちが善いか悪いかは神さまが見てゐて下さる。それから此の人だつて(美人の方を指して)こんなにお洒落はしてゐても、娑婆ちや鐵道の線路番のおかみさんで、信號の旗を振るのを間違へた爲に汽車が衝突したのだといふぢやないか？ 誰れが好き好んで汽車を衝突させる奴があるものか？

ねえ、怪我だあね。それを後の見せしめだといつてこんな所へ抛り込んで、抛り込まれたやつこそいゝ面の皮だ。お前さんが運わるく損な番に巡り合はせたのだよ。それからあの物を言はない女だつて、自分の子どもを河へ投げ込むにや、よく〜辛い譯があつたのだらうさ。それはみんな神さまが御承知だ。

(この時、ちよつと森となると、先ほど寢床の上に横になつた女の、啜り泣きの聲が聞こえる。みな〜其方を振り向く)

フォードシア あれはね、寝ると昔の事を想ひ出して、それが夢だか現だか、どうしても分からないのだつて。昔惚れてゐた錠前屋さんの事を想ひ出して泣くのだつて。かはいさうねえ。

(マスロワ奥から酒氣を帯び、ヴォツカの瓶を持つて出て来る)

マスロワ さあ、みんな景氣づけに一杯やらないか？

(腰をかけ、一口喇呷飲みにして、大ロシヤに渡す。老女囚は顔をしかめる。美人寄つて来て、瓶を大ロシヤの手からひつたくるやうにして飲んで、マスロワに返す)

フォードシア (マスロワに) 姉さん、またそんなに飲んぢやいけないわ。もうおよしなさいよ。

マスロワ これが飲まずにゐられるかい、お前。飲むとこんなに、いゝ氣持になるぢやないか？ 昔の事も今の事も、みんな忘れちやつて、たゞもういゝ氣持！ だが、今日は私、全く驚いちやつたよ。私が罪人だなんて、ねえ、

どうすれば、そんな事が言へるのだらう？ このかはい、カチューシャが人を殺したなんて。ほんとに驚いて了ふわ！ その癖、みんなで、私を見ちやニコニコして喜んでゐた癖に。裁判所でも、あの意地のわるい検事のほかは、みんな私に色目をつかつてゐたよ。

美人 男といふ奴は、みんなそんなものよ。女と見りやあ、砂糖に蠅のたかるやうに集まつて来るのよ。

マスロワ だけど、それが悪いのでもないし、誰れが悪いのでもないのよ。あたりまへの事なのよ。ねえ、私は斯う思ふのよ。一體世間の男は、どんなものでも、好い女を欲しがらないものはないし、好い女はさうして欲しがられないために出来たのだから、精々欲しがらずやうにするのが當りまへだわ。私

も今まで随分と、いろんな男に出くわしたが、たゞの一人だつて私を欲しがらないものは無かつたよ。私にも、自分か好い女だか何うだか、そんな事は知らないけれど、みんなが欲しがるから好い女なのだらうと極めちやつたのよ。全く、出くわす男も、出くわす男も、みんな私一人を的に、いろんな知恵を絞つたり、金をつかつたり、喧嘩をしたりして来たもの。

大ロシヤ さうだらうとも。其の話を聞かしてお呉れよ。

マスロワ 聞かさうかねえ。まづ一番にね、私にねらひをつけて来たのが、私の育てゝもらつた別荘の若旦那でね、身分の高い人だつたのよ。それがお前とうく私を手ごめにして、翌くる朝、百圓札一枚私の懐へ押し込んださう行つちまつて、二度とたよりもしなくなつたのよ。

老女囚 百圓札を?

マスロワ あ、百圓札を。だけど其のころは私まだ金なんか欲しくなかつたものだから、其のお金をみんなに呉れちやつて、さうかうしてゐる内に私は妊娠したと分かつたのさ。それで別荘にも居づらくなつて、或る役人の家へ奉公したのさ。するとお前、その主人といふのが、五十面を下げて、うるさく私に附きまとつて来るぢやないか。あんまりうるさいものだから馬鹿野郎とどなりつけといつてそこも飛び出しさ、其のうち生み月になつたものだから、村で造り酒の抜け賣りをしてゐる産婆の家へころがり込んで、子どもだけはそので生み落としたが、其の子はすぐ孤兒院で死んで了つた。

活 復

美人 かはさうにねえ。

マスロワ 其の次に奉公したのが山林の役人の家だつたが、その主人は前の役人よりも上手だと見えてね、とうとう私をおびき出して、うまく手に入れて了やがつた。けれどそれも長くは續かないで、その家の細君と摺み合ひの大喧嘩をしてさ、給金を踏み倒されて飛び出しちやつた。(酒を又一口飲んで次へ廻はす)

大ロシヤ そんな分らない奴は、張り倒してやればいゝのに。

マスロワ それから何所だつけ? さうく伯母が洗濯屋をしてゐるから、この洗濯女にならうかと思つたのだけどね、それもあんまりみじめだと思つて、桂庵の手から或る女主の家へ奉公したのさ。すると今度はその總領息子で、中學の五年生といふのが、もう口髻なんかはやしてゐてね、學校そつ

ちのけに私の跡ばつかし追ひ廻してゐるものだから、私がそゝのかしてても  
ゐるやうに母親から睨まれて、そこも長續きはしなかつたのさ。

美人 油断もすきもあつたものぢやないね。

マスロワ それから二度目に桂庵へ行くと、又傳手で或る旦那といふのに引き  
合はされたが、それが髪も髯も胡麻鹽になつた脊の高い男でね、無氣味な眼  
つきをしてニヤ／＼笑ひながら私にふざけかゝつて來たのよ。するとおかみ  
が其の男を次の間へ呼び出して「どうです旦那、田舎から出たての手いらず  
の處女ですよ」つて頻りと取り持つてゐたが、とう／＼二十五圓で世話にな  
ることに話がついたの、でね、私は貰つた手附金で借りを返したり、着物や  
帽子を買つたりした。

美人 つまり旦那取りだね？

マスロワ あゝ。だけど私は、よく／＼男運の悪い女だと見えてね、その旦那  
の世話で引き越した下宿の隣り部屋に、面白い氣象の、お店者がゐて、いつ  
か其の男と出來てしまつたのさ。さうなると私の氣象で、其のまゝぐづ／＼  
にしてゐるのがいやで、さつぱりと旦那に打ち明けて別かれて貰つて、其の  
男と一緒に世帯を持つたよ。所がそのお店者め、いゝ頃合のところて、商用  
だとか何とか言つて出て行つたさきり歸つて來ないで、私を置き去りにして  
やがつた。

大ロシヤ 憎いつたらありやしない。そんな奴こそ、目つけて引つぱたいや  
るといふのに。



マスロワ さうなつて行くのが、つまり私の運だつたのだねえ。そして私はその頃からやけ酒を飲むことをおぼえて、一日酒浸りになつてゐることもあるし、しらふの時は、つくづく自分で自分に愛想のつきることもあるつて、もう／＼私の體は何うなつてもいゝから、したい三昧の事をして過ごせといふ氣になつたのよ。そして或る女衞の手で、私はとう／＼今までの家へ身を沈めて了つた。それがめぐりめぐつて、こんな落ちになつちやつたのさ。ねえ、人の行末ほど分からないものはないわねえ！（また酒をあほる）は、は、は、今度はシベリヤかサガレンへでも行つて、そこの牢番のおかみさんにでもなるかねえ！

美人 でも、それほどの男の中で、お前さんの方から打ち込んだ男があつたか

えり？

マスロワ それは一人や二人はあつたさ。私を置き去りにした男だつて、憎くはなかつたよ。だけどやつぱり一番長く残つて、今でも時々思ひ出すのは、初恋だね。その公爵の若さまだけは、其の頃の、うぶな心でしみ／＼かはいゝと思つたつけが、今から思や薄情者だつたのねえ。

美人 お店者でも公爵でも、揃ひも揃つて薄情者だつたのだね？

マスロワ あゝ、だからもう／＼男といふものはたよりにならないものと極めちゃつたのさ。（また酒を飲む）あゝあ。随分長い身の上話をしちやつたわね。フロードシア さあ姉さん。水をあげませう。もう其のお酒はあよしなさいよ。私が斯うしてしまつて置いてよ（ベンチの下から藥罐を出し水をコップにつ

いですゝめ、瓶をそこへ隠す)

マスロワ あゝ、いゝとも。煙草が一服呑みたいねえ！ 誰れも持つてゐないの？ おやく、今日は不景氣だね。

フーードシア 私、あとであの押丁さんにねだつて置いてあげるわ。

マスロワ ありがたうよ。今度はお前さん一つ身の上ばなしをおしよ。そんな優しい人が、どうして自分の御亭主を殺さうなんて、大それた事を思ひたつたの？

フーードシア それはね……私ほんとに不都合だつたのよ。私がお嫁に行つた時は、やつとまだ十六だつたの。でね、見たことも無い人の所へ無理やりお嫁にやられて、私、たゞ恐いばかりで、ほかになんにもありやしないのだから

ら、泣いて泣いて泣き通して、どうしても其の人と一緒になつてやらなかつたの。私、今考へると、あの時の心持が自分でも分からないわ。きつと魔がさしたとでもいふのでせうね、とうとう其の人を殺しても自由になりたいと思つて、そんな真似をしちやつたのですよ。それなのに、不思議なこともあるものだわね、八月ばかり保釋になつてゐる間に、すつかり其の人が好きになつたの。馭者をしてゐるのだけれど、それや氣立の優しい人でね、今ぢや兩方から離れられないやうになつてるのよ。それでどうか此の事は願ひ下げにしたいと思つただけれど、もう間にあはないのですつて。そして五年の宣告を受けて、此のさきどうして生きてゐられるでせう。ねえ、姉さん。察して頂戴。

(看守入り來たる)

看守 マスロワ。これをお前の主人だといふ女の人が差し入れて行つたよ。金が二圓五十錢と巻煙草が一函。

マスロワ お金と巻煙草！ そらね、言はないことぢやない。今日は何か福があると思つたのだよ。看守さん、どうも有りがたうございました。

看守 禮はその人に言へ。

マスロワ それやさうですけどさ。その人はきつと私をかへてゐた家のおかみさんですよ。看守さん、どうぞ、よろしく言つて下さいな(看守の出て行く後から追うて行つて、出口の所で銀貨を一つ握らす) さあこれで、呑みたくいゝと思つた煙草にもありつけたと。マッチはどこにしまつてあるの？(一

本つけて、うまさうに貪り吸ふ) あゝあ、酒と煙草の中に私の命はあるんだね！

(煙の香を嗅いで他の女等、羨ましさうに寄つて來る)

老女囚 (さつきから縫つてゐた針仕事を下に置いて) 私にも一本相伴させてお呉れな。お前さん、辯護士に控訴の事を頼んだのかい？

大ロシヤ 私にも一本お呉れな。控訴する時には、お前さんの名を書かなくちやならないのだが、そんな手續はしなかつたらうね。私が知り合ひの上手な辯護士を世話してあげやうか知ら。

老女囚 そんな事は、お前さんよりも、私の方が明るいよ。

大ロシヤ 私、なにもお前さんに言つてるのぢやないよ。餘計な事を言ひて

ないよ。

老女囚 へ、煙草が呑みたいものだから、急にお世辭をつかやがつて。

大ロシヤ どつちがだい？ この百びる婆あめ。

老女囚 業つくばり、今に見てゐろ、晩になるとたゞぢや置かないから。

美人 まあ、静におしよ。

大ロシヤ へん、誰れが百びる婆あなんか恐がるものかい。

(看守再び這入つて来る)

看守 ころ／＼。また騒ぎ出したか？ 静にしろ、静にしろ。(鐘が鳴る)そら、

もう晩のお祈りの時刻だ。みんな列をつくつて行くのだぞ。列をつくれ、列をつくれ。

活

復

(女囚一同列を造り看守の跡について上手口から出て行く。舞臺ちよつと空虚となる。やがて下手口から看守に伴はれてネフリエドフ、ファナーリン入り來たる)

看守 囚人は今禮拜堂の方へ行つてゐますから、マ스로ワだけ先にこゝへ連れて來ます。御面會の時間はかつきり十五分ですよ。

ファナーリン 典獄に特別談判をして來たのですから、十五分と限つた以上、それより延びてはよくありませんし、他の囚徒の歸つて來ない前にお濟みにならないと、此の室で會つてゐるのが犯則になります。だから御用談はなるだけ早くお進めになる方がいゝでせう。

ネフリエドフ ありがたう、ありがたう。ではしばらく、どうかあなた方はあ

ちらでお待ち下さい。

(ファナーリンと看守、出て行く。ネフリユドフはそこに立つたまゝ、室内を見廻はしてゐると、下手の戸があいて、マスロワ小さき足の足つきで這入つて来る。ネフリユドフの顔を訝り見ながら、ちよつと髪を撫で、數歩前に立留まつて、其りうとした身なりを見、媚びるやうな微笑を浮べて)

マスロワ 今日(こんにち)は。あなたですか、私に面會したいとおつしやるのは?

ネフリユドフ (胸を躍らせ聲をしゃがらせながら) 私だが、お前、もう忘れられたらうね?

復 活

マスロワ (まぶしさうにして媚びる態度で) さうね、どなたでしたつけか、今

ちよつと思ひ出せませんわ。だけどきつと、私をかはいがつて下すつた方(かた)でせう?

ネフリユドフ (帽子をぬいで二三歩近より) 私だよ、よく見て思ひ出して下さい。さあ——分かつたか?

マスロワ (しつかりとは見ないで、そはくとして) え、おぼえてゐます、おぼえてゐます。お名前はあの……さうでしたつけね?

ネフリユドフ ネフリユドフ

マスロワ (耳にとめないで) さうくよくあるお名前でしたつけね。で、どうして私(わたし)が分かりましたか?

ネフリユドフ 昨日(きのう)裁判所(さいばんしょ)で、陪審官(はいしんくわん)になつてお前の裁判(さいばん)に立ち會つたが、お

前は氣がつかならうね？

マスロワ まあ、さうでしたか？ ちつとも氣がつかまませんでした。ぢやあなたも御一緒で私を裁判なすつたのね？ 私シベリヤへやられるのですつてね？ (言つて唇をふるはせ) あんまりひどいわ、無實ですわ、まちがひですわ。私決してそんな悪い事なんかしやしません。……でもあなた、どうして逢ひに来て下すつたのですか？ 裁判がどうかなるのですか？

ネフリユドフ その事で來たのだが、私はどんな事をして、お前のその無實の罪を救つてあげやうと決心したのだよ。

マスロワ ほんとうに御親切ね。(つゝまじやかに男に近づき、娘らしい調子で) あなたね、若し實際私を助けて下さるおつもりなら、少しお願ひがある

のよ(賤しげに諷ひ笑ひをする)

ネフリユドフ あゝ、何でもするから、言つて下さい。

マスロワ かなへて下すつて？ どうもありがたう。私ね、何よりも先に控訴しなくちやいけないのださうですが、いゝ辯護士を頼むとお金が大へんかゝるんですつてね？

ネフリユドフ その事なら、もう私が手続きをして來たから安心して下さい。今日來たのもお前にそれを承知して置いて貰はうと思つたからさ。で、もし控訴でいけなければ上訴でも何でもして、是非ともお前を救ひ出すつもりである。金のことなんか少しも心配するに及ばない。

マスロワ (わざと嬉しげに) まあ、うれしいこと！ それで安心しましたわ。

それから今一つのお願ひてのはね、……(躊躇して)私少し買ひ物がしたいのですけど、……あんまり澤山頂いても無駄につかつたり、みんなに借りられたりするばかりですから……ほんの少しばかり、お錢をね……十圓でいいのですよ、たゞそれだけでいいの。

ネフリユドフ お錢を? ……(絶望の様子で)あゝ、あゝ、いゝとも、上げるよ。

マスロワ ちよつとお待ちなさい。看守があつちへ向くまで(外の方にゐる看守の様子をふりかへり見て、後向きにさもしげな手つきで金を取らうとする。看守の姿見えなくなる)さ、さ、早く下さいな。どうも、ありがたう(急いで其金を靴下の中へ隠す)

ネフリユドフ (じつと見てゐて絶望のためいさをする)あゝ、お前、そんなにまでなつたのか?

マスロワ え? 何ですつて? (見上げて媚び笑ひをし)そりや、もう、どうせ牢屋へまで来たんですもの、貧乏もしますわ。このつきいらつしやる時に、若しまた願へたらまたお錢を少し貸して下さいな……、それから巻煙草を少し持つて来て下さるといゝのだけれど……あ、さうく、私、今一つ願ひがありますわ。(また看守の姿を見て)あなた、あいつに二圓ばかり掴ませておやんなさいよ。うるさくていけないから。

ネフリユドフ よしく〜。

(看守の方へ行く。マスロワは其の間にベンチの下の酒の瓶を取り出し、

其の口から酒をあほる。ネフリユドフの入り来るのを見て、あはて、瓶を後手に隠し壁の方へ寄る)

マスロワ 今、水とコーヒーと交ぜたのを飲んだところなの。私、一日中何も飲まなかつたものだから、喉が渴いて、喉が渴いて、こゝが焼けつきさう(苦しげに胸をたたく)

ネフリユドフ お前今、何かまだ私に頼みがあると言つたね?

マスロワ さうく、さうでしたつけ、……何だつたらう? あ、さうく、私の妹分てね、フョードシアといふ女囚があるのですよ。それやかはい、女でね、何も知らない内にお嫁にやられたといふので、御亭主を毒殺しやうとしたのですつて。それが保釋されてる間にすつかり仲なほりが出来て、今ぢ

や羨ましい程な夫婦仲なのだのに、どうしても罪に落ちなくちやならないのださうです。あの子も、ついでに救つてやつて下さらない?

ネフリユドフ ふむ……それは調べて見なくちや分らないが、辯護士に頼んで見やうよ。私はね、お前を一日も早くこんな所から救ひ出して、せめてもつと静かな病院か何かの方へでも廻して置きたいと思ふのだが、何なら其の女も一緒にその方へ行けるやうに運動しやう。

マスロワ さうして下さるとありがたいわね。

ネフリユドフ もつと周囲の静な綺麗な所へでも移つたら、お前の眠つてゐる魂も眼をさまして来るだらう。

マスロワ お説教のやうだわね。



ネフリユドフ あゝ、カチューシャ、お前はまた本とうの事を想ひ出して呉れないのだね？ ネフリユドフといふ名が分からないのかい？

マスロワ 何だか變ですわね。ネフリユドフだのカチューシャだのつて、あなたはどうしてそんな名前を御存じ？

ネフリユドフ (十年前の寫眞を取り出して女の手に渡し) どうか此の寫眞を見て思ひ出して呉れ。

マスロワ (寫眞を手に取つて) あなたのですか？ 女のかたもゐらつしやるの

ね？ 綺麗ですこと！ (尙じつと見てゐる)

ネフリユドフ よく見て下さい。十年前お前がまだ、私たちの別荘にゐた頃の

寫眞だ。あの、復活祭の晩の事を、お前はもう忘れたのか？

マスロワ (男の顔に目を向け、じつと見て身ふるひし寫眞を床の上に投げつけ

飛び上がるやうにして、覺えず拳を固め) この悪魔め！

ネフリユドフ (マスロワの撲らんとするのをじつと受けて) カチューシャ、私はお前にあやまりに來たのだよ。

マスロワ 悪魔！ 悪魔！ 薄情者！ あなたのやうな薄情者は、私がこんな

ざまになつたのを見物する氣でも來たのでせう？ よくも私の前で、あなたの名前が名乗れたものだ。

ネフリユドフ カチューシャ、みんな私の罪なのだから、どうか許して呉れ。

マスロワ それだけの事なら、何もこゝまで追つかけて來る必要は無いぢやありませんか？ こんなになつてる私を、なぶつてやらうと思つて來たのです

か？ あなたにだけは私、こんな境遇で會ひたか無かつたのですよ。それをわざ／＼探し出して、こんな悔しい耻しい思ひをさせられて……あ、私、あひたくない、あひたくない！（兩手に顔を埋めて泣く）

ネフリユドフ 私は實に申譯の無い事をした。十年前のお前に對する不始末が昨日の裁判を見て空恐ろしくなつて來た。私はどうかして其の罪が贖ひたいと思ふのだが、カチューシャどうか私を許して呉れ。

マスロワ（顔を上げ涙を振り拂つて）御免なさいよ、私が悪うございました。私もう疾くの昔あさらめた筈でしたつけ。ついあなたのお顔を見たものだから、あんなに怒つちやつて。でも、みんな運ですわ。そんなに心配して下さらなくてもようございます。お互にあの頃の事は、もう／＼忘れて了ひませ

うよ。

ネフリユドフ いや、忘れてゐるのが私の過ちだつたのだ……（苦しげな沈黙の後）子どもがゐたつてね？

マスロワ え、ゐましたけれど、都合よくすぐ死んぢました……。

ネフリユドフ 都合よくつて、どうしてそんな事をいふのさ？

マスロワ だつて、生きてゐる居られたら、私が死んぢますわ。私もその頃病氣だつたのですよ。

ネフリユドフ 叔母たちがお前に暇を出したのだつてね？

マスロワ（娘らしい怒りをちよつと見せて）當り前ですわ。身重になつてるものを、誰れが使つて呉れるものですか。それよりか叔母さまたちは何うなす

つたてせう？

ネフリユドフ あれ等は二人とも先だつて死んでしまつた。

マスロワ あら、まあ！ ……あゝ、もう、そんな事は考へつこなしにしませう。みんなお仕舞になつた事ですから。

ネフリユドフ いや、まだお仕舞ぢやないよ。私はどんなにしても過ちを贖はなくちやならない。そのすまない内はお仕舞ぢやない。

マスロワ つまらない事ですわ。何も贖ふものなんかありません。過ぎ去つたことはしやうが無いぢやありませんか？

活 復

ネフリユドフ 一そ私の財産を残らずお前に譲つて、それで罪亡ぼしをしやうかとも思つたが……。

第 三 幕

マスロワ 冗談はおよしなさいよ。もう時間が來ますよ。

ネフリユドフ とてもくそんな事で済むものぢやない。やつぱり、私のこの體で救はなくちやならないのだ。行くところまで行かなくちやならないのだ。ねえ、カチューシャ、私はお前の體の清まりきるまで、何所までもついて行つて、どんな事でもするから、それで私を許して呉れるだらうね？

マスロワ なんて諄いのでせう？ 私、あなたを許すことなんかありやしませんわ。昔の事なんか言ひつこなしですよ。さあ、もうお歸りになるのでせう？ (軽く手を握つて) 辯護士のお金の事は頼み申しましたよ。

ネフリユドフ その事はたしかに引受けたから、書類が出來次第、お前の名を書いて貰ひに來ます。けれどもお前は、たゞそれきりて別れるつもりかい？

他に言ふことはないのかい？ 許すとも許さないと、憎いとも懐かしいとも言つて呉れないぢやないか？

マスロワ そんな野暮つたい話はもうお止しなさいよ。

ネフリユドフ カチューシャ、どうか是れだけは眞面目に聞いて置いて呉れ。私は今日限り地位も財産も棄てて了つて、お前を救ふために、お前と結婚しようと思ふのさ。

マスロワ (じつと聞いてゐて、屹となり) 何ですつて？

ネフリユドフ (決心の調子で) お前を救ふためには、お前と結婚でもする。

マスロワ 結婚でもするのですつて？

活 復  
ネフリユドフ あゝ、それが私の、神に對する義務だと思ふ。

マスロワ (じつと見すえて、唇を顫はせ抑へがたい悲憤と冷笑の調子で) 神に對する義務だつて！ はゝ、はゝ、神さまのお引合ひなんか、お止しなさいな。神さまを頼むのなら十年前だつたのでせう？ (顔をネフリユドフの方へ突き出す。酒の息がする)

ネフリユドフ お前、酔つてるね？ まあ少し落ちついてお呉れ。(肩に手をかける)

マスロワ (振りはなして) 私、落ちついてますよ。さう、酔つてもゐますよ。けれど酔つたつて、言ふ事は正氣よ。ね、あなた、お聞きなさい。私は醜業婦なのですよ！ 人殺しの罪人なのですよ！ はゝ、私はさういふ身分のものですよ。そしてあなたは、公爵の御前でゐらつしやる。それがまあ、私と

夫婦にならうとおつしやるんだから、とぼけてるわねえ、随分とぼけてるわねえ。そんな馬鹿な料見はお止し遊ばせ、御身分にさほります。あなたの奥方には、何處かのお姫さまでもお迎へ遊ばせ。私が御用なら、十圓札一枚で、いつでも御用を達しますよ！ (酒瓶を片手に持ち片手を其の上に乗せて、憤怒の形相でつつ立つ、調子は初めわざと冷嘲であつたのが、段々怒りに移る)

ネフリユドフ 静にして呉れ、カチューシャ、私がどれ程良心に耻ぢてゐるか、

お前には分からないのだ。そんな耻かしい事を言つて……。

マスロワ 耻ぢだつて？ ヘッ！ どうせ私は醜業婦さ！ 十圓札で御用を達

すに不思議はなからう？ もつともお前さんは、あの時百圓札を私の懐へ

ねぢ込んどいて逃げ出したつね。

ネフリユドフ カチューシャ、カチューシャ、みんな私が悪かつたのだ。だから正

式に結婚して、罪を贖はして呉れといふぢやないか？ お前は正氣を失つて

ゐる。

マスロワ まだふざけた事を言つてるのかい？ 私をだしに使つて自分の罪を

贖ふんだつて！ ヘー い、料見だ！ 此のうへまだ私をなぶり物にしやう

といふんだね？ 私に耻をかゝせやうと思つて、やつて来たんだね？ ……

さあ！ 私に指一本でもさして見ろ。お前さんと結婚する位なら、首でも縊

つて死んだ方がましだ！ 私、もう、その生つ白い脂ぎつた顔を見るのも嫌

だ。さあ、もう、いゝ加減に歸つて行かないか？ 出て行け！ 出て行け！

(地だんだを踏んで罵り、また酒をあほり瓶を傍に置く)

ネフリユドフ (涙ぐんで) ぢや今日は歸るが、どうぞあとで、も一度思ひ直して呉れ。お前に見せやうと思つて持つて來た寫眞だから、之れは預かつて置いて貰ひたいよ。(寫眞を拾つてマスロワに渡す)

マスロワ (寫眞を渡されて見るともなくそれを見込む。そして聲をあげて泣く) あゝ! なぜ、あの時死なかつたのだらう? なぜ、あの時、死なかつたのだらう? (寫眞を抱いたまゝ横倒しになる) 死にたい、死にたい! 殺して下さる!

ネフリユドフ (倒れたマスロワをじつと見おろし、靜にその側によつて扶け起こす。マスロワ又酒の瓶を取つてベンチに腰をかけ飲まんとするのを、ネフ

リユドフ後から肩に手をかけ) お前の體が汚れてゐやうがゐまいが、そんな事は私に取つちや何でもない。私がお前と結婚しやうといふのはその體の中に眠つてゐる、お前の靈魂を呼び覺ましたいからだ。お前の靈魂を今一度昔の清いカチューシャにして、そのカチューシャと結婚したいのだ。お前をシベリヤから救ふだけが救ひぢやない。私のこの心持をよく呑み込んで呉れ。私はもう、世間並みの結婚ばなしなども斷つて、堅い決心で來たのだから、かはいさうだと思つて私の願ひを聞いて呉れ。分かつたか? (マスロワ次第に顔をあげ前面を見つめる) 私は必ずお前を救はなくちや置かないよ。(マスロワつとりとなつて、瓶を取り落とし立ち上る。看守入口から顔を出し)

看守 公爵、どうしたのですか? もう時間が切れましたよ。

ネフリエドフ (カチューシャを見つめて) また来るよカチューシャ。

(看守のゐる方へ出て行く。マスロワは失神したやうになつて正面上を見つめたまゝ彫像の如く立つてゐる)

幕

第 四 幕

監獄内の病院の一室、白い壁、正面中央に窓、其左右には薬品棚など、横兩方に入口、室の中程、稍上手より大きな木地の角テーブル、其上に薬瓶、乳鉢など置いてある。テーブルの周圍に二三脚の椅子。

マスロワとフォードシア、椅子に腰をかけて丸薬を揉み居る。

フォードシア でもよく酒も煙草も一どきに止されたわね。

マスロワ もとから好きで呑み出した譯でないからだらうさ。

フォードシア だつて、あんなにうまさうに呑んでたものを急に断つて了ふつ

てのは、大抵のことぢやないと思ふわ。あの方の眞實が通じたのだわね。全くあの方は親切なお方ね。私までお蔭でこんな樂が出来て、私これなら、斯うして姉さんと二人でゐられるのなら、三年や四年の懲役くらゐ何でもないとと思ふわ。こんど公爵さまが入らしたら、お禮を言はせて頂戴な？

マスロワ あゝ、お禮をお言ひ。本當にあの女囚室からこゝへ來ると清々することね。藥の香ひだけでも胸がすくやうだし、こんなにもまた白い前掛をかけて……私、前掛をかけるのはほんとに久しぶりよ、十年ぶりよ。こんなさつぱりした風をしてゐると、何だか昔のカチューシャに戻つたやうで、うれしくてたまらないのよ。

活 復

フロードシア えゝ、昔の姉さんに戻つてお了ひなさいよ。私、お話を聞いた

だけでも、其の頃の姉さんが懐かしいわ。

マスロワ 私だつて、あの頃が懐かしいけれど……、私だけ昔に戻つても、傍がさうでなければつまらないわね。

フロードシア ネフリユドフ様だつて、さうに違ひないのよ。姉さんを、昔の清い姉さんに引き戻さうと一生懸命骨折つてゐらつしやるのよ。姉さんはほんとに仕合せてすわ。

マスロワ だけど考へて見ると、その間の十年は長いわねえ！ 變つたわねえ！ これてまた舊の私に戻れるものか知ら？ 世間がさうさせて呉れるか知ら？

フロードシア それは姉さんの心がけ一つよ……ねえ、姉さんはいつか、あの方と分かれた時の話をしましたつけね？ なぜあんな親切な方が、も一度そ



の別荘へいらつしやらなかつたのでせう？

マスロワ それはね、戦地からの歸りで、寄る暇が無かつたといふのよ。それで私は、夜わざく／＼停車場まで逢ひに行つたつけが……

フョードシア どう？ で、逢へて？

マスロワ 私だけ一目見たけれど、それなり別かれて了つたのさ。あゝ、あの時ほど悲しい、情ない思ひをしたことはなかつたつけ。あの時私は、ふつとりと、世の中が頼みにならないものだと思ひ切つたのだよ。

フョードシア どうしてさ？

マスロワ 其のころは私ね、まだ何も知らないものだから、お腹の子どもの事を思ひ出しては、嬉しいやうな心配なやうな氣持で毎日々々あの人の歸つて

來るのを待つてゐたのよ。叔母さんたちも歸りには是非寄るやうにと手紙を出して、待ち暮してゐると、こんどは、規則で中途に寄り道をする事は出來ないと電報を打つて來たのさ。

フョードシア まあ！

マスロワ だから私、是非會つて置かなくちやならないと思つてね、汽車の着くのは夜の二時だといふから、みんな寝たあとで、料理番の娘を連れて、肩掛を頭からすつぽり被つて、停車場へ駆けつけたのよ。

フョードシア 大抵の事ぢやないわね。

マスロワ 其の晩は生ぬるい風が吹いて、大雨が降つた後の闇夜でね、近路をしやうと思つたのが、すつかり迷つてしまつて、停車場へ着いた時はもう發

車の二番目の鈴が鳴つてゐるぢやないか？　だものだから、私、あはて、プラットホームに駆け込んで、一等室の前まで行くと、中にはラムプや蠟燭が目ばゆいやうにもつてゐて、二人の士官は天鵝絨の椅子に倚りかゝつてラムプをしてゐるし、あの人はさちんとした装で、椅子に肱をもたせて笑ひながら巻煙草を吹かしてゐたの。

フロードシア　で、向ふでも姉さんに氣がついたの？

マスロワ　いゝえ。私、其の平氣な顔を見ると、腹が立つやうな、懐かしいやうな、何ともいへない氣持になつて、いきなり拳で窓を叩く拍子に、列車はがたつと揺れて動きはじめたのよ。で、はじめは、せめて一言でもと思つて、其の箱と並んで走つてゐると、内から其の様子を見た一人の士官が、硝子戸

を明けやうとして、しきりとがた／＼させたの、するとあの人も窓の側へやつて来て、二人でがた／＼やつてる内に汽車は段々早くなり出して、やつと窓の明いたときは、もう間に合はなかつたのだよ……（涙ぐんでうつとりとなる）

フロードシア　それから？　それから？

マスロワ　私がまだ一生懸命に追つかけてるものだから、驛の役人がやつて来て、引き戻して了つたのさ。私は雨で濡れてるプラットホームから、危なく滑り落ちやうとしたのを、やつとの事でこんどは線路へ降りて追つかけたけれど、どうすることも出来やう筈はないし、水槽の所まで来たときは、肩掛は風に吹き飛ばされて、裾は泥と水でべた／＼になつてゐた。それを、あ

とからいさせき追つついて来た娘が聲をかけたものだから、私は始めて氣がついて、べつたりそこに坐つたなり、泣き出しちやつたのさ。

フョードシア 私も、泣きたくなつたわ。

マスロワ ぶぶ濡れになつた娘も縋りついて泣くし、二人暗い中で、あの時こそしみく泣いたよ。あの人はあんな氣樂な真似をしてゐて、私はこゝて斯うして土の上にはつてゐると思ふと、なぜだかふつと生きてるのがいやになつて、このまゝ汽車に轢かれて死にたいと思つたよ。けれど、その娘にせがまれて夢のやうに家へ歸つて来た。

フョードシア でも、よかつたわね。

活 復  
マスロワ あくる朝まで考へて、お腹の子どもがかはいさうだと思ふと、また

氣が折れて了つて、今日まで斯うして生きて来たのさ。…だけど、その時から、私やふつつりと、神さまも人間も頼みにしない氣になつたのよ……

フョードシア もう其の話はやめませうね、また十年前に戻れるのだから……

マスロワ 考へて見りや、あの方ばかりが悪いのでもないわね。それに今ぢや、あんなにして下さるものを、こないだは私、ほんとに濟まない事をしたよ。

こんど逢つたらお詫をして置かう。

フョードシア 私また、姉さんに教はつた歌を歌つてあげませうか？

(ネフリエドフ、小便に伴はれて入り來たる)

マスロワ (うれしげに走り寄り、手を出して握手し) よくいらして下さつたの

ね。丁度今も噂をしてゐたのですよ。フョードシアが一度お目にかゝつてお禮

が申したいのですつて。

フォードシア あなたが公爵でいらつしやるのですか？（ネフリエドフの前に膝をついて）私、お禮の申しやうもございませぬわ。ほんとに〜ありがとうたうござります。どうぞいつまでも〜姉さんのお傍にゐられるやうになすつて下さいまし。

ネフリエドフ（フォードシアを立たして）よし〜、そんなに禮なんかいふ程の事ぢやないよ。つまりあなたの心がけがいゝから、病院でも許して呉れたのわ。

フォードシア いゝえ、みんな公爵さまのお蔭でござりますわ。ぢや姉さん、

復 活

私、ちよつと看護婦部屋へ行つて來ますわ。

マスロワ さうら？

フォードシア 公爵さま、御免遊ばせ。（禮をして出て行く、ネフリエドフらなづく）

ネフリエドフ 今日ハね、控訴の結果が分かる筈で、こゝで辯護士のファナールン君を待ち合はす事になつてゐるが、お前もこゝへ移つてから、もう可なり日數が立つたから、大分馴れて來たらうね？

マスロワ え、馴れて來ました。實は早くお目にかゝりたいと思つて待つてゐました。

ネフリエドフ 何か用が出來たのか？

マスロワ 用事つてほどの事でもないのですが、ほんとうに伺つて見たいと思

ふことがあつたのですよ。

ネフリユドフ ふむ、何だらう？

マスロワ ほんとうに伺つて見たいと思つたのはね、……何だか時々自分で獨り極めにそんな事を思ふものですから……まあよませう。また此の次にうかゞひませう。それよりか、あなたは、あれからずつと田舎へ行つてらつしやいませしたつてね？

ネフリユドフ あ、私はね、今度の跡じまつの爲に久しぶりであの別荘へ行つたよ。そして其のついでにお前の伯母さんといふのに逢つて、子供の墓も尋ねて来たよ。

活 復  
マスロワ よくお墓が分かりましたねえ。伯母さんはまだ達者でゐましたか？

私も行つて見たいわねえ。どんなになつてゐてせうねえ！

ネフリユドフ 別荘にはもうチホン爺も居ないでね中學生上りの若い男が留守番になつてゐて、建物は恐ろしく荒れてるし、屋根の鐵板の剝けたなりになつてゐる所などもあるし、煉瓦塀の上には草が一杯生えてゐた。それから裏庭つゞきの林檎や櫻の林はね、ちやうどこぼれるやうな花盛りで、あの垣根の接骨木の花も昔のやうに香つてゐたよ。

マスロワ あ、私、もう一度自由な身になつて行つて見たい！（うつとりとなる）

ネフリユドフ それからあの、よく氷の裂ける音のした川では、バチャ／＼と洗濯をする音が聞こえてね、あの窓に顔を突き出してゐると、和かな風が吹

いて来て、しんとした中に蜂のうなり聲が聞こえて来たよ。  
 マスロワ もう雪は無かつたでせうね。

ネフリユドフ 無論さ。そしてね、私はやつとの事でお前の伯母さんの家を尋ねあて、逢つて見たよ。お前の事をよくおぼえてゐたよ。

マスロワ あ、昔の自由な身になりたい！……そして本當にかなふ事なら……  
 ネフリユドフ 私は誓つてお前を自由な身にする。そしてお前の蘇つた心で私と一緒にゐて呉れ。

マスロワ それがかなふ事でせうか？……

ネフリユドフ かなふとも。お前の心はさうして今一度清い昔に戻るのだ。

マスロワ さうでせうか？……けれどだめですよ。一ど汚れた體は誰れも

活 復

信用して呉れないから。

ネフリユドフ (肩に手をかけ、やさしく) そんな事を考へちやいけない。カチュ  
 ーシヤ。

(助手醫入り來たる)

助手 あなた、此の方が面會室で待つてゐられるさうです。

(名刺をわたす)

ネフリユドフ あ、ファナーリン君が來たのだ。ではちよつと會つて來ます。

(マスロワと助手とに目禮して出て行く)

助手 (マスロワの方に寄つて行つて) お前さんの名はマスロワだつたつね？  
 マスロワ えい。マスロワ。

助手 何所で稼いでゐたの？ 此の土地で？

マスロワ (むつとして) 何所だつていゝぢやありませんか？

助手 以前のお前さんの馴染が、お前さんをこゝから救ひ出さうと骨折つてるといふぢやないか？ 本當かい？

マスロワ 早くいらつしやらないと、院長さんが見えますよ。

助手 大丈夫、今は誰れも來ないことになつてゐるよ。だが、私もそのお馴染さんにになりたいものだね。一たいどんな人だい？ 素敵に身分の高い人だといふぢやないか？

マスロワ えい、えい、非常に身分の高い人よ。

復 活

助手 名は何といふのだい？

マスロワ うるさいぢやありませんか？ (立つて窓の方へ行く)

助手 そんなにうるさからなくつたつて、いゝだらう？

マスロワ よかありませんよ。早くあつちへ行つて頂戴。

助手 馬鹿にかたぎな事を言ふね。お前さんにも似合はないぢやないか？

くら監獄の中だつて、おもしろい事も出來やうぢやないか？ 看護婦さんのお手つだひなら、少しやあ我々の方へもお愛相くらゐしても、損は行くまいぜ。

(女の傍へ行つて腰を抱かうとする。それを振り放して)

マスロワ あんまり人を馬鹿にしなさんなよ。(又テーブルの方へ行き、腰を掛けて丸薬を揉む)

助手 (ついで来て横手から) 新米にしちや、揉みやうがうまいね。その粒の切りかたがまづいや。さ、手つきを教へてあげやう。

マスロワ 分かつてゐますよ(脇で助手を突き飛ばす)

助手 (後から抱きすくめて) この性悪女め、そんなに人をぢらすものぢやないよ。ちよつとていゝから、まあ私のいふ事をお聞き。お聞きつたらね。今夜ね、あの小さい廊下の戸を明けて置くから、そのすぐつき當りが私の宿直部屋だよ。いゝかい? 分かつたかい?

マスロワ (立ち上りすりぬけて) 知らないつてばねえ。私、聲を立てゝよ。

助手 川前さん、ち小づかひに困つてるやうだから、こないだから是れを上げやうと思つてたのだよ。取つて置いて頂戴(銀貨を握らせやうとする)

マスロワ (それを烈しく床の上に投げつけて) 人を馬鹿におしてないよ。(助手が捉らへんとする手を振りほぐし、追つかけられるのを逃げ廻る)

助手 いよゝおれに脇鉄砲を呉れるつもりだな。見やがれ、どうして呉れるか?

マスロワ (また捉らへられて) 放さないか? 放さないと蹴とばすよ。畜生! 畜生!

(振りはなすはづみに、テーブルの上の物を床に落とす。騒音。その途端に下手口から醫長、ネフリニドフとファナーリンとを伴ひ入り來たる)

醫長 くら! 何をする? なんだその騒ぎは?

助手 (びつくりして) 先生、どうも困りました。この室へはいるとすぐ此のや



まですからね、實際あさされて了ひます。大抵様子で分かつてゐませうが……  
 どうも明からさまに申上げるのも極まりがわるいやうで……どうかお察しを  
 願ひます。ちよつと油断して優しい事を言ふと、もうすぐこの通りの事をし  
 かけるのです。どうして〜、なか〜の女ですよ。

醫長 一たい君、何をしたのです？

助手 何つて、どうも驚きました。私が丸薬の揉みかたを説明してゐますと……  
 ……此の女がだしぬけに私に接吻しやうとするのです。

マスロワ まあ！ 大嘘つき！ 嘘ですよ、嘘ですよ。

活 復  
 助手 嘘なものですか？ ……こないだから私につきまとつてる様子が、何か  
 私をだまして、便宜を得やうとでもしてゐるらしいのです。

マスロワ (泣き聲になつて) あんな卑怯な、自分でした事を私に塗りつけて。

大嘘つき！ 大嘘つき！

醫長 黙んなさい！ ……そんなに騒いぢやいかん。それよりかそこらに落ちて  
 てるものを片づけなさい！

助手 本とうに此の女には驚きました……

醫長 もういゝから、君もあつちへ行きたまへ。君の部屋へ歸つてゐるがいゝ。

マスロワ、お前はもう此所を出るのだぞ！ (大きな眼鏡越しにけはしくマ  
 スロワを見る。そして入口に立ちすくんでゐるネフリエドフを顧みて) こういう  
 ふ種類の女は、どうも困りますね、公爵。

ネフリエドフ 分かりました、分かりました。ではどうか暫くこのまゝになす

つて下さる。

(醫長出て行く)

マスロワ (ちづくと寄つて来て) 御免なさいな? 私、あの騒ぎでびつくりして了つたのですよ。

ネフリユドフ (冷かに) これが辯護士のファナーリンさんといつて、いろいろ

お世話になつての方だ。(マスロワ辭儀をする)

ファナーリン 今日はおもしろくない知らせを持つて來たのですよ。控訴は却下されて了ひました。

マスロワ 私、そんな事ぢやないかと思つてゐました。今さらしやうがございませぬわね?

活

復

ネフリユドフ 併しほかにまだ方法があるから、失望しなくてもいい。こんど

は直ぐ上訴して特赦を願ふことにするのだ。

ファナーリン 裁判の形式に手落ちがあるので、取り消すことの出来る裁判です。氣を落とさないでおいでなさい。

マスロワ (ネフリユドフに) 私、もうその事はどうでもいゝと思ひますから、この上あんまり御心配下さらないやうにね。どうせもう、斯うなつた私ですから。それよりか、私、お願ひがあるのですよ。私は今の騒ぎで、また舊の檻房へ入れられるのでせうけれど、あれは決して私がしたのぢやありませんから、どうかそれだけはね、悪しからず思つて下さいな。

ネフリユドフ あゝ、もうそんな事を言ふ必要は無いよ。お前が何をしやうと、

それはお前の自由さ。私はどんな事があつても、一旦さまつた以上、お前を救ふといふ決心は變らないから。

マスロワ あなたまでがそんな事をおつしやつちや、私の立つ瀬がありませんわ。ねえ。悪く思はないで下さいな。あの助手めが私を見くびつて……

ネフリユドフ もういゝ、もういゝ。

フナーリン どうも困つたものですね。

マスロワ 私、どうしたらいいでせう？（両手を顔にあてる）

ネフリユドフ（あはれみの眼で見て、其の手をおろさせ）もうそんな事はいい、といふぢやないか？

活 復

フナーリン ではともかくも、此の上訴書類に署名して下さい。

マスロワ どこへですか。私、手がふるへてゐて書けさうもありませんわ。（襟巻の端で涙を拭ひ、啜り泣きながらテーブルに寄りうつむいて名を書く。辯護士は其の箇所を指定してゐる）

ネフリユドフ 上訴の結果の分かるまでには、手間取るだらうから、お前は多分この十日の護送隊に這入つて、シベリアへ行かなくちやなるまい。併し特赦されれば、すぐ歸つて來られるし、私もお前の隊について行くから、宿場々々では會へるだらう。一時の事だと思つて辛抱して呉れ。

マスロワ えゝ、もう、私、その事はちつとも苦にしてゐませんから、どうか御心配下らないやうにね。シベリアへ行かうがこゝにゐやうが、どうせ私に取つちや同じ事ですから。

ネフリユドフ 途中でいるものを考へて置いて呉れ、持つて行けるだけは買ひ  
とゝのへるから。

マスロワ 何もいるものはありませんわ。

ネフリユドフ シベリヤで逢ふまでは、これでまた當分逢へまいから何か私に  
言つて置くことがあるなら……

マスロワ 何もございません。

ネフリユドフ では、是れて用が済んだから、私等は歸るよ。

フナーリン 公爵、私は一足先へ失禮いたします。

ネフリユドフ いや、私も御一緒に行きませう。さやうなら。

活 復

マスロワ さやうなら。

(マスロワは離れて立つたまゝ二人に拶挨拶し、其の出て行く後姿を見送つて、テーブルの前にくたりとなり、淋しく頬杖をついて考へ込む。フォードシアが這入つて来る)

フォードシア (マスロワの傍へ行き覗き込んで) また檻房へ歸るのだつてね?

私よく知つてゐますわ、姉さんが悪いのぢやない、みんなあの助手の奴が悪  
いのです。あいつが不斷してゐた事を、なぜ姉さんは言つつけてやらなかつ  
たの?

マスロワ もう何も言はないことにしたのさ。私たちの言ふ事を信じて呉れる  
ものは、世間に一人もありはしないのだから。

フォードシア でも、公爵だけは信じて下さるわ。

マスロワ だめなの。誰れも信じちや呉れないの。……それもその筈だわね。私たちのやうになつたものは、實際自分で自分を信じてゐることさへ出来ないのだもの。私ね、一ど、或るお祭りの晩だつて、そんな身の上がつくつくいやになつて、同じ家にゐたピアノの女に其の話をすると、其の女もひどく自分の身をはかなんで、二人一緒にそつと家を出る相談を極めたのさ。そして支度をしてゐると、そこへ男どもが大浮かれて上つて来て、ヴィオリンを弾く男は曲弾を始めるし、禮服を着た大男と髯武者の小男とは私とピアノの女の女をつかまへて踊り出すしさ。とうとう夜どほし踊つたり唄つたりして、あくる日からまた元の通りさ。逃げ出す相談なんか何處かへ行つちやつた。何が何だか分かつたものぢやないのよ。

フォードシア 公爵は何か用があつていらつしやつたの？

マスロワ 控訴がだめになつて、私はこの月の十日にシベリヤへ行くのだとさ。

フォードシア まあ！ 何うしたのでせうね？ いや／＼さうと極まつたら、

私も姉さんと一緒に行きたいわ。

マスロワ そんな事が出来るかどうか分りやしないよ。私ね、お前さんにかたみが上げたいのよ（棚の隅から小函を取り出す）私が是非シベリヤへ持つて行かうと思ふのは此の小函一つさ。この中にはそら（蓋をあけて品物を取り出す）あの寫真と、それから昔つかつてゐた小鏡と、それから此の指輪と……此の指輪もあの方に始めて接吻された時の記念よ。これをお前さんに上げるから取つて置いてちやうだい。

フョードシア まあ、どうもありがたう。

マスロワ それから此の赤い花のリボン！ これを差して、あの晩教會へ行つたつけ。こんな風にさしたか知ら（鏡に向かひ昔のやうな身づくろひをして見る）こゝいらが襟飾りで一杯になつてゐて……（鏡の中の姿をしばらく見つめてゐて、がっかりしたやうに鏡を投げ出し）あゝ、もう、昔のカチューシャぢやなくなつた！

フョードシア 私、こんどこそ、あの歌を歌つてあげるわ。（低い聲で）

カチューシャ かいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましよか

マスロワ（フョードシアと同音に）

カチューシャ かいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましよか

（此の歌をくり返すあひだに幕がおりる）

## 第五幕

シベリア一寒村にある驛所の構内。奥は見わたす限り一面の雪の原で、谷の両側に村のつゞいてゐる遠見。雪のつもつた並樹の向ふが道になつて其の道を上手から下手へ、下手から前面へと出て來られる。下手に小屋あり、戸を明け放してある、其の軒下に腰かけ、數個のラムプなど。また上手には岩に寄せてテントが張つてある、時刻は夕ぐれて、遙かの空には入日の影が赤く雪に反射してゐる。

奥の道からマスロワ等一隊の囚徒が護送の兵數人に導かれて出て來る。

普通犯人はマントを着、國事犯人は學生服でゐる。村の男女が、食料品など賣りに來る。囚徒は護送兵の指揮で小屋やテントの中に這入り、焚火などしはじめる。

女商人 (他の二三人と下手奥から籃など提げて出て來る) まだ一人も着かないね。この宿へは二三十人も來るか知らず?

男商人一 こんどは全體で七百人からの囚徒だといふぜ。今にシベリヤは罪人で一杯になるだらうよ。

男商人二 今夜は少しはい、商賣があるかなあ。

女商人 今夜は復活祭だから、囚人だつて少しは御馳走をするだらうよ。(上手奥を見て) さあ着いた〜。

男商人一 十四五人は居るやうだ。(みなく道の方へ出て見る。警護兵を先に立てた囚徒の一隊、並樹の向ふを通つて出て來る)

女商人乙 さあ〜、魚はいかゞですか? 善い魚ですよ。安くして置きますよ。五錢に負けときますよ。

女商人甲 卵はいりませんか? 卵はいりませんか? 新しい卵ですよ、産みたての卵ですよ。

男商人 肉菓子に焼豚、素麵に羊の肝、おいしいものばかりでございます。おしくて安いものばかりでございます。

(囚人等がや〜と寄り來たり、商人等と話す)

護送の士官 ころ〜。こ〜へ來ちやいかん。あつちへ行つて居れ、あつちへ



行つて居れ。それから囚徒はそのテントと小屋に分かれて、いつものやうに夕飯の仕度をするのだ。

(病人を助けなどして、みなく小屋とテントの中に這入つたり、戸外に腰をおろしたりする。小屋とテントの中には火が焚え上がる。士官兵士とも去る)

老男囚 (テントの方で) おれはもう駄目だ! 二十時間もあるきつゞけだからもう駄目だ。

老女囚 まあ四五時間はこゝで休めるんだから、ゆつくり寝て休むがいよ、お爺さん。

活 復 若女囚 (獨語のやうに) 虱婆さん! お前さんも此の間に虱でも取つといてお

呉れよ。私たちが助かるから。

マリア さあ、皆さん、静かになすつて下さいよ。(小屋の方へ行つて病囚に) あなた寒かありませんか? 蒲團にしつかりとくるまつてお在て下さいよ。今夜は復活祭ですね?

病囚 (屋内で) みなさんが御親切にして下さつて、實にありがたいです。今夜は復活祭ですね。はい、世間は復活祭でも、私は死んで行くのです(咳をする)

若女囚 あの人、事によつたら今夜が持てないかも知れない。

老男囚 かはいさうだな。

一男囚 (奥の方で) 此の柱にナイフで字が彫つてあるよ。えゝと「余は千八百

八十年八月十七日刑事犯の一行と共に此の所を通過せり。國事犯人は余一人なり。一人の友人はカザンの瘋癲病院にて自殺せり。余は主義のために倒るるものなり」

マリア 名が書いてありますか？

一男囚 ペルキンとしてあります。

マリア あゝ、其の人の事なら聞いたことがありますよ。

病囚 私なんか、これくらゐの病氣でぐづく言つちやならないですね。

マスロワ あゝ、やつと寝かしつけた（小屋で言ひながら舞臺の中程へ出て来る）

活 復

マリア マスロワさん、どうしたのですか？

第五幕

マスロワ あの子の父親はもうよつほどの年ですのよ。母親がチブスで死んでから、こゝへ来るまで十日間といふもの、あの子を抱きとほして来たのですつて。それをね、意地のわるい護送兵が急に手錠をはめるといつたものだから、子供が抱けないと言つたら、口返答をしたといつて、頬つぺたを血の出るまで撲つたのです。そして泣きたてる子供をむりやり引つたくるのですよ。私、あんまりかはいさうだつたから、すかして引きとつてやりました。

シモンソン （奥手から出て来る）子供は静まりましたね？

マスロワ えゝ、やつと静まりました。私の頬ぺたを吸つて眠つて了ひましたよ。

シモンソン さあ、みんなもう、大抵にして中へ這入つたら何うだね？ 食事

の仕度をした方がいゝだらうよ。

(マ스로ワ、マリア、シモンソンの外皆去る)

マリア マ스로ワさん、私はあなたにあやまらなくちやなりませんよ。實はね、あなたが斯うして特別に我々國事犯囚の方へ御一緒におんなすつたのが不平でしたのよ。私たちは無論平等主義ですけれど、何だかあなたと御一緒といふ事が、私たちの汚れのやうな氣がして、あんまり打ち解けられなかつたのですよ。それが此のごろから段々、あなたの御經歷に似ず清い立派な心だと知れて来て、私、實は耻ぢ入つてゐました。シモンソンさんが初めからあなたを大事になすつたのが本當だと氣がつかしました。ですからね、どうか是れからは何もかも打ち明けて、お互に助け合つて、このかはいさうな囚徒の

ために盡くしてやりませうね。私の丁見の狭かつたのを勘辨して頂戴な。

マ스로ワ マリアさん、何をあつしやるかと思つたら、そんなつまらない事を。勘辨も何もありませんわ。私こそ、こちらへ御一緒になつてから、まるで別の世界へても来たやうで、今まで十何年ちつとも知らなかつた貴い仕事をしてゐる氣がしますの。これなら私、なまじつかあちらにゐるよりも、罪人になつてこゝへ流された方がよつぽどありがたいと思ひます。みなさんの方が世間の人よりもずつと立派な方ですわ。ですからどうか此のさきもみんな御一緒でいろゝの事を教へて頂きたいのですよ。

シモンソン もう四年たつと自由になりますから、それまで辛抱して下さい。自由になつたら、一緒にうんと立派な事をして、あれ等のために盡くしてや

りませう。我々がこれまで嘗めて来た辛苦艱難の結果を、生かして世の中へ應用してやらなくちやいけません。あなたのその美しい顔にも、随分長い辛苦の痕が見えてゐます。今まではつらかつたでせうが、こゝまで来れば、此のさきもう落ちつてはありませぬ。こゝで新しい生涯が開けるのです。さう思ふと私は愉快でたまりません。

マスロワ 私も此のごろ何だかそんな風に思はれて来ました。

シモンソン てね、私は……

(この時背後の道を通つてネフリユドフ、一人の士官に伴はれ急ぎ足に這入つて来る。)

マスロワ (振りかへり見て、ネフリユドフと顔を見合はせ) あ! ネフリユドフ

さまが……(シモンソンの後へ隠れるやうにする)

シモンソン さあ、また二人で病人の着物を乾かしてやらう。いらつしやう。

(シモンソン、マスロワ小屋の中へ這入る)

マリア 公爵、しばらくお目にかゝりませぬ。私もう國へ御歸り遊ばしたかと思つてゐました。

ネフリユドフ いや、トムスクで國からの通信を待つてゐたものですから、四五日遅れました。別に變つた事もありませんでしたか?

マリア はい、變つた事もございません。あのシモンソンさんが、しきりと公爵にお目にかゝりたいといつてゐました。

ネフリユドフ シモンソン君が? 何でせう?

マリア マスロワさんに關した事ぢやございませんか？ シモンさんは、初めからあの方を親身のやうにして大事にしてあげてゐますし、いろ／＼また考へもあるのでございませう。

ネフリユドフ シモンソン君といふのは、實際立派な人物ですね。

マリア はあ。あゝして、一度思ひ立つた事は實行しなくちや置かないといふ人ですから、どうしてもこんな事になります。御承知でもございませうが、菜食論者だものですから、着物まで一切動物の毛や皮は用ひないで、護謨製のものばかり着てゐます。あの人だけには、刑事犯人までが懐いてゐます。それにマスロワさんも實に立派な心がけの婦人になられましたよ。公爵のお骨折はむだぢやございませんでした。

士官 さあ、もういゝから引つ込みなさい。(マリアを去らせる) 公爵、乾いてゐてお寒うございませう。火がございませうか(ネフリユドフ巻煙草を與へる) いや、御馳走さま。あの、閣下がお世話をしてゐらつしやいます、マスロワといふ婦人は、全く感心な婦人でございませう。

ネフリユドフ (うるさいといふ風で) どうですかね？ さうでせう／＼。

士官 (腰の水筒を取り出し) コニャック酒が少しばかりございますが、いかがですか、公爵？ 寒さ凌ぎに一口召し上りませんか？

ネフリユドフ いろ／＼(逃げ廻るやうにして) 私は酒を斷つてゐますから。

士官 ですか。ぢや私がちよつと失禮して(一口飲んでもとへ收める) 併し

この邊鄙なシベリアで高貴のお方と御一緒になるといふのは、實に名譽ですな。いや、全くあのマスロワといふ女は……

ネフリユドフ さうですく。どうか君、その女に至急會ひたいのですがねえ。

士官 承知しました。どうぞこちらへ入らつしやい（小屋の入口を覗くとマス

ロワとシモンソンが火の傍で病人の外套を乾かしてゐる。ネフリユドフをそこへ招いて置いて、士官は禮をして去る）

ネフリユドフ（不快げに入口に立留まり）カチューシャ 私はお前に用があつて來たのだが……

マスロワ（冷淡に）あら、さうですか？（立たうとするのをシモンソンとめて）

シモンソン それより先に、私が一つ公爵にお話したい事があるから、ちよつと待つて下さい。（外へ出て）公爵、私は是非あなたに聞いて頂きたい事があるのですが、お差支ありますまいか？

ネフリユドフ いゝですとも、話して下さい。

シモンソン それはカチューシャの事ですがね、あなたとカチューシャとの關係はよく承知してゐますから、一應御相談をするのが義務だと思ひまして……

ネフリユドフ はあ、それは伺ひませう。

シモンソン その御相談と申しますのはね、私とカチューシャとの關係を一應お耳に入れて置きたいと思ふのです。

ネフリユドフ（段々心配げに）とおつしやるのは？

シモンソン 實は私があれば結婚したいのです。

ネフリユドフ (驚いてじつと見つめ) ふむ！ それはカチューシャも同意ですか？

シモンソン まだカチューシャの意志は聞いて見ませんが、これから打ち明けて聞いて見やうと思ふのです。

ネフリユドフ (冷かに) それなら、私の關する事ではありますまい。カチューシャの心一つでさまる事です。

シモンソン それはさうですが、併し、あなたの許しが無ければ當人だつて、

自由な返事は出来ませぬ。

ネフリユドフ どうして？

シモンソン つまりあなたとの關係がはつきりしない内は、どちらへ行くこと

も出来ないのです。

ネフリユドフ 併しその問題はもうさまつてゐます。私は私の義務と信ずる事

を行つて、カチューシャの負擔を軽くしてやれば済むので、そのためにあれの自由を束縛する必要はありません。

シモンソン それはさうでせうが、併しあれば、あなたのお世話になることを望まないやうです。これだけは間違なからうと思ひます。

ネフリユドフ 別に世話をするといふ譯ぢやありません。

シモンソン でせうが、カチューシャは、あなたの折角の御好意も飽くまで受けない決心でをります。

ネフリユドフ それなら、何も改めて御相談なさる必要はないぢやありません

か？

シモンソン 所がカチューシャは、あれの思つてゐる通りにあなたもなつて頂きたいと望んでゐるのです。

ネフリユドフ といふのは、私が爲なくちやならないと信じてゐる事をやめて呉れといふのですか？ それなら無理といふものです。私は私の義務としてするのですから、先方の希望でやめるといふ譯には行きません。併し君、お互にこんなつまらない話はもうやめやうぢやありませんか？

シモンソン いや、大事な事ですから、どうかよく聞いて下さい。それでは、あなたは、カチューシャの一身に關しては、手をお引き下さるのですね？

活 復

ネフリユドフ それはカチューシャがいやだといふのならしかたもありません。

シモンソン ではあれにさう言ひませう。

ネフリユドフ 私があれば話さなくちやならない事があるのです。

シモンソン 公爵、私は決してカチューシャの色に溺れて斯んな事をいふのではありません、誤解して下さい。私はたゞ彼れを苦勞した立派な婦人として愛するのですから、どうかして、あれとこれから半生の苦勞を分かちたいと思ふのです、あれの行くところへは、何所へでもついて行つて、あれの重荷を軽くしてやりたいと思ふのです。

ネフリユドフ カチューシャが君のやうな立派な保護者を得たのはあれの幸福です。

シモンソン ではどうか、其の幸福のために、私とあれとが一緒になることを



御承認下さい。

ネフリユドフ 私は何と御挨拶していいかわからないが、とにかくカチューシャに來るやうに言つて下さい。直接話して見たいと思ひますから。

シモンソン (うなづいて入口の所へ行き) カチューシャ! カチューシャ! (呼びながら中へ這入る)

(マスロワ出て來たる)

マスロワ (おづ／＼と出て來て、冷かに) 何か御用ですか?

ネフリユドフ (カチューシャの手を取つて) カチューシャ、今日はいろいろ話したい事があるよ。だが何よりも、是れが一番さだ(ポケットから書類を取り出し) 今度いよいよお前の上訴が聞き届けられたよ。今日この書類がフ

ナーリン君から届いた。斯う書いてある。請願局長は皇帝陛下の思召によりカチューシャ、マスロワが受けたる徒刑二十年の宣告を破棄し、シベリア附近の地方に於いて一年間の流刑に處すね、これでつまり特赦と同じ事になるのだ。

マスロワ ぢや、ここまで來なくてもよかつたのですかねえ!

ネフリユドフ とう／＼私たちの望みが之れて半分成就した譯だ。お前は特赦になつたのだ。

マスロワ 私ひとり他へ行かなくちやならないのでせうか?

ネフリユドフ それはお前の自由だが、その前にお前に聞かなくちやならない事がある。私は今シモンソン君からお前の身の上について相談を受けたよ。

マスロワ (うつむいて) 何んな相談?

ネフリユドフ シモンソン君がお前と一緒にになりたいといふのだ。(言つて思ひに沈む、しばらく間を置いて) お前が承知さへすればいゝのだから、それにはまつさきに私とお前との關係をはつきりさせて呉れといふのだ。

マスロワ あなたと私の關係といひますと?

ネフリユドフ 私はこれまでも言つた通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しやうと思つてゐた。そしてお前も一時はあんなにして怒つたが、併し段々私の心持を解して呉れて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た。そこへシモンソン君が這入つて來たのだから、お前は今、私とシモンソン君と、二人に一人を擇ばなくちやならない地位に立つてゐる。

つまり私と結婚して呉れるか呉れないかといふ問題を決めればいゝのだ。お前はどういふ氣でゐるか? シモンソン君とも親しくしてゐるやうだから、どうか本當の決心を聞かして呉れ。

マスロワ (途方にくれた様子でしばらく黙つてゐて) 私の決心で、それはもう疾くに決まつてゐるぢやありませんか?

ネフリユドフ 何う決まつてゐるのだ?

マスロワ 私のやうなものが、今さら人の妻になれつこはありません。私は一生獨りで暮します。

ネフリユドフ カチューシャ、それはお前の心得違だ。何てお前が人の妻になれない譯があらう。

マスロワ いゝえ、こんな體で結婚するのは、其の人の顔をつぶすやうなもの  
です。愛してゐる人の顔をつぶしてすむものぢやありません。

ネフリエドフ ではお前はシモンソン君を愛してゐるか？

マスロワ ……はい、愛してゐます。

ネフリエドフ あゝ、やつぱりさうだつたか？ お前もシモンソン君を愛して

ゐたのか？ …… それでは私をどう思つてゐて呉れるか？ 私はお前に取つ

ちや何ういふ立場にゐるのかい？

マスロワ あなたと御一緒になることも無論お断りいたします。

ネフリエドフ シモンソン君は、お前があれと結婚することを望んでゐると言

つたよ。

マスロワ さうですか？ (沈黙の後) さうです。本當は私、あの人と一緒

になりたいのです。あなたには長くお世話になりましたけれど、どうぞ悪し

からず思つて下さいまし。シモンソンがそんなに言つて呉れますなら、私、

あの人と結婚した方がいゝと思ひますから。

ネフリエドフ それはお前本當かい？ 本當に考へてした決心かい？ 無論シ

モンソン君も立派な人物だから、それと結婚するのはお前の幸福かも知れな

いが、私もこゝまでついて來たのだから、お前の最後の言葉が聞きたいよ。

マスロワ 私、シモンソンと一緒にあります。どうぞそれを許して下さい。

ネフリエドフ きつと決心したのか？

(沈黙)

マスロワ はい。決心したのでですから、ね、どうか堪忍して下さい。

ネフリユドフ ふむ、思ひもかけない事だつたね………ぢや、どうも仕方はない、さうするが……私の長い務めはここでお仕舞になるのだね？ あ、長い旅だつた！ それでは私はもうこゝに用の無い身だから、今夜にもすぐ跡へ引き返さう。お前の幸福を祈つて置くよ、カチューシャ。

マスロワ どうも済みません。

ネフリユドフ お前の将来はシモンソン君に頼むから、私の仕残した務めを果たして貰ひたい。

マスロワ あの人と一緒に、あなたのお志を守つて行きます。

ネフリユドフ どうかさうして呉れ。では、之れて永いお別れになるのだね？

(両手を取る)

マスロワ え、永いお別れに。

ネフリユドフ そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も、一緒に終つて了つたのだ。さやうなら、カチューシャ(両手を取つたまゝ、ぢつと見る)

マスロワ (突然男の胸にすがり) あゝ！ 私、このまゝぢや別かれられません、このまゝぢや別かれられません。どうして私の愛がこのまゝ消えて了ひませう？ 私はまだあなたを愛してゐます、あなたを愛してゐます。愛してゐればこそ、あなたと結婚することをお断りしたのです。

ネフリユドフ カチューシャ！ カチューシャ！

マスロワ あなたが始めて監獄へいらつしやつた時は、たゞ譯もなく憎くて、

殺して丁度程に思つたのですが、今ぢやもう、そんな心は無くなつて、昔よりも、もつと大切なあなたになりました。酒も煙草も斷つて、あなたのおつしやるやうに、段々昔のカチューシャに戻りかけて來たのも、みんな其のためですよ。

ネフリエドフ カチューシャ！ カチューシャ！

マスロワ それで時々は、ひよつとかすると、あなたのお言葉通り夫婦になつて、楽しい日を送れるものかと、己惚れてゐたこともありましたが、それは私の料見ちがひでした。一度汚れた身は、傍がそんな事をさせません。あの病院の事があつてから、私はふつ／＼己惚れの夢なんか見ないことにしたのですよ。

ネフリエドフ あれは私が至らなかつたからだ、どうか許して呉れ。

マスロワ 許すの、許さないのといふお話ぢやございません。私に取つちや、

それがみんな悟りの道になつたのですから、今ぢや誰も怨んぢやしませんの。

ネフリエドフ では、今でもお前は私を愛して呉れるか。

マスロワ 愛してゐます。深く／＼愛してゐます。ですから、私、どうしても

此の體であなたと御一緒になることが出來ないのですよ。私はどんなつらい思ひをしても、あなたのお身に累ひをかけぢやならない。

ネフリエドフ 併しそれは私が承知の上だから、救はれた體に累ひも何もある

譯はないぢやないか？

マスロワ いえ、いえ、いくらあなたは御承知でも、それをさせては私がすみ

ません。これだけは何んな事があつても思ひ切らうと決心したのですから、どうぞ其のまゝにして置いて下さいな。途々も、お目にかゝつて親しくすればするほど執着が残ると思つて、なるだけよそ／＼しくして来たのですよ。

ネフリユドフ お前の志は實にうれしいが、そんなにしてシモンソン君と結婚して、これから後幸福に暮せるだらうか？

マスロワ それはもう心配しないで下さい。あの人はあんな立派な人ですから、私の心はよく呑み込んでゐて、少しもそれを氣にかけませんし、私だつてこれから、眞心をつくしてあの人の仕事を助けて行きます。その内には自然と幸福な日が来るだらうと思ひますの。

ネフリユドフ では是れでいよいよ私の用は無くなるのだね？

マスロワ 随分長いあひだ御親切を受けましたわね。

ネフリユドフ お前とシモンソン君とは、やつぱり長くシベリアに残るつもりか。

マスロワ はあ、どうせ四五年はゐなくちやならないのですから、出来るだけ長くシベリアに居て、不幸な囚徒のために盡くしてやりたいと思ひます。あなたは何？

ネフリユドフ 私も、一度モスクワへ歸つてから、またすぐ出直して北の方へ行き、そこで一生をあはれな人々のために捧げたいと思ふ。萬事の手筈はモスクワで定めやう。

マスロワ モスクワからこゝまで何のくらゐありませうね？

ネフリユドフ 三千里以上だらうよ。

マスロワ 随分遠く来ましたわね！

ネフリユドフ あゝ、世界の果までもついて来やうと約束したが！

マスロワ それから今夜は復活祭でしたね？ あの時から十年のあひだに、随分變つた所で變つた復活祭をしますこと！

ネフリユドフ 十年のあひだにねえ！ そして今夜が私たち二人の永劫のお別れになるのだ。そして別れ〜に新しい生涯に這入るのだ……私は是をお前に紀念として上げやう。同宿したイギリスの紳士が呉れたバイブルだがね、ゆふべ私が偶然明けて見たところにするしがつけてある。馬太傳の十八章だ、ちよつと読んで御覽。

マスロワ (書物を取つて燈火にすかして) 「其のとき、多くの弟子はイエスに來たつて曰はく、天國に於いて最も大いなるものは誰れぞや？ イエス、幼子と呼ばれ、彼等の中に置きて曰はく、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば、天國に行くことを得ず、凡そ此の幼子の如く自ら謙下るものは、天國に於いて最も大いなるものなり。」

ネフリユドフ さう！ ぢや、これでお別れにしやう。もうすぐ十二時だ。さやうなら(言ひながら、カチューシャを抱き昔のやうに唇に接吻しやうとするのを、カチューシャ額で受ける、長い接吻)

(この時遠くの寺で復活祭の鐘の音が聞こえる。ネフリユドフ驚いたやうに「キリストは蘇りたまへり」と言つて離れる)



脚本復活  
不許複製

大正三年三月十四日印刷  
大正三年三月十八日發行

(定價金七拾錢)

脚色者 島村瀧太郎

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町中の丸五十八番地

發行所 新潮社

電話(番町)二、二二三番  
振替(東京)二、七四二番

印刷所 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

右同所 三秀舍

ネフリユドフ ぢや御機嫌よう、カチューシャ！(言つてすたくと逃げるやうに並樹向ふの道へ出る)

マスロワ (見送つて) さやうなら、あなたも御機嫌よう！

(ちよつと間を置いて鐘また鳴る、小屋及テントの中から「キリストは蘇りたまへり」といふ聲が幾つか聞こえる。)

マスロワ (淋しくこちらへ向き直つて、「キリストは蘇りたまへり」(沈んで言ひながら次第に頭を垂れる))

幕



近代名著文庫

ダンヌンツイオ作

第一編  
死の勝利

生田長江氏譯(第七版)

總洋布最上製 定價一圓四錢十郵稅二錢

世界的最大傑作の邦譯 近代名著の粹を集めて新文藝に志ある人に薦む

アルフォンス・トオデ作

第二編  
サフオ

武林無想庵氏譯(第四版)

總洋布最上製 定價九錢五拾錢八郵稅

「ちよいとさア、こちらをお向きなさいッては」  
燃ゆるが如き瞳にこめたる彼女の魅力より何人が  
遁れ得べき。彼女は老いを知らざる妖姫の美しさ  
と共に飽くを知らざる彼女の淫靡を有せり。あら  
ゆる人間の美を一つの體に集めたる彼女は、又あ  
らゆる人間の愛慾を一つの心に集めたりき。サフ  
オの名に謳はれたる此南歐の唄女の戀物語よ。東  
方の若き人々の胸の血を躍らすべく、今こゝに齎  
らされたり。燈火花の如き春の宵のキス、秋雨冷  
たき樹陰の哀別のすゝり泣き、濃艶を極めたる幾  
情景は浪漫的の甘き夢を唆のかすものあるべし。

近代名著文庫

オスカアワイルド作

第三編  
遊蕩兒

本間久雄氏譯(第二版)

總洋布最上製 定價一圓四錢八郵稅

世界的最大傑作の邦譯 近代名著の粹を集めて新文藝に志ある人に薦む

ツルゲエネフ作

第四編  
煙

大貫晶川氏譯(新刊)

總洋布最上製 定價一圓八錢郵稅

「煙」一巻、是れ實にツルゲエネフ獨得の哀切悲痛  
の戀物語也。零落せる貴族の娘と、若き大學生と  
の間に結ばれたる情思を経たなし、露西亞の新時  
代を描ける傑作にして、飽迄も妖艶にして、日に  
驕る排擧栗の如く常に榮華の夢に酔はんとするイ  
リナ。敬虔、可憐、野菊の如くにつまじきチ  
アナ。作者ツルゲエネフの女性描寫は、此二女  
性に得意の限を盡くせる也。情熱的にして沈鬱、  
考へ深きリトホフの悲哀と苦悶とは、わが新時  
代の青年の何人か雖も、よく共鳴せざるを得ざる  
可し。譯筆亦稀に見るの圓熟と精妙さを示せり。

近代文學の一大異彩として推稱せらるゝオスカア  
ワイルドの傑作『ドリアンケレ』を邦語に譯して  
『遊蕩兒』と名づく、艶治妖麗の一貴公子を主人公  
として、其享樂感溺の生活を心ゆくばかりに描き  
盡くせるもの。作者が鬼才を恣にする巧緻の筆を  
以てし、字々珊瑚を彫り匂々眞珠を綴る。そこに  
美しき夢魔の影と、あやしくも人を酔はしむる美  
酒の高き香りとおらん。近代生活の産める最も複  
雑なる人生味と藝術味と、必ずや卿等近代人の胸  
へて強く共鳴するものありて存すべきを疑はず。敢  
て一本を薦むる所以也。

近 代 名 著 文 庫

アルチバアセフ作

第五編

サアニン

中島清氏譯(第二版)

總洋布最上製 定價壹圓六拾錢 小包拾貳錢

近時頻出する翻譯文學の中、質に於いて量に於いて最も注目すべきは中島清氏の譯に成れるサアニン也。他にも同じ譯あれど此方は一字を増減せざる完譯也。原作者は露國の作家アルチバアセフの代表作にして、男女學生の戀愛を中心として大膽に性慾を描けるが中に、作者の新道徳觀を寓せる物にして、露國學生界を風靡せる所謂サアニズムの宣言書とも云ふべきもの也。譯筆は頗る老練、殊に原著と比して精確、殆んど讀すべきの點あるを見ず、近來の好譯書也。裝幀は例によりて華麗也(東京毎日新聞評)

世界的最大傑作の邦譯 近代名著の粹を集めて新文藝に志ある人に薦む

ドストエーフスキイ作

第六編

虐げらる人々

昇曙夢氏譯(近刊)

總洋布最上製 定價壹圓四拾五錢 小包拾貳錢

原著者が流刑四年に亘る苦役の後、その深刻なる經驗と博大なる同情とを傾注して、世の虐げられる人々の隠れたる悲惨の歴史を描ける千頁に近き大作にて、自らの幸福を失へる女、其變化極まりなき運命の奇蹟を盡くせる物語は、必ず讀者をして悲嘆と同情との涙を絞らしむべく、露人は聖書と共に同情の福音として今に愛讀堪かざる所以也。譯者は此の作が我が邦人の胸に共鳴するの多きを思ひ、特にドストエーフスキイ紹介の第一着歩として此代表作を選び、約半年に亘る努力を傾注して此の權威ある翻譯を完了せり。

オスカア著

獄中記

本間久雄氏譯

第五版

▼定價四拾五錢  
▼郵送料四錢

オスカア著

警句集

生方敏郎氏譯

第三版

▼定價四拾錢  
▼郵送料四錢

イフセン作

鴨

森田草平氏譯

第三版

▼定價六拾錢  
▼郵送料六錢

チエホフ作

櫻の園(附)叔父ワ

瀨沼夏葉女史譯

新版

▼定價六拾錢  
▼郵送料六錢

内田魯庵氏  
宮田修氏  
徳山秋聲氏  
大杉榮氏  
序

警句集  
女と惡魔

安成二郎氏譯

最新刊

▼定價四拾錢  
▼郵送料四錢

島崎藤村氏作

綠蔭叢書一編  
**破戒**

第九版  
紙數五百八十頁  
定價八十錢  
郵送料八錢

著者が長篇の第一作にして、新文藝の先驅をなせるもの。丑松の悶え、お志保の嘆き、ある特殊の階級を描いて社會問題に觸れ、信濃の地方特色を鮮かに寫して郷土藝術の匂ひ豊也。此一篇の爲めに著者は、三年間の勞苦と困厄とを拂ひし事實に見ても、その尋常一様の作品に非ざるを知るべき也。

綠蔭叢書二編  
**春**

第四版  
紙數六百頁  
定價九十錢  
郵送料八錢

これ、著者が青春の思ひ出を描けるものにして、「文學界」當時の浪漫的運動の真相は遺憾なくここに活寫せらる。戀と涙と、憧憬と苦悶と、通篇六百頁、これ客觀化せられたる一大詩篇也。熱烈なる詩人の情緒を、冷嚴なる藝術家の筆を以て描ける所に、本篇の特色は存する也。

綠蔭叢書三編  
**家**  
(全二冊)

第三版  
總紙數九百頁  
定價七十五錢宛  
郵送料八錢宛

本篇は、明治の年代が有せりし文藝の中にて、最も偉大なるもの也。描く所二大家族の二十有餘年に亘れる歴史にして、其嚴肅、一絲紊れざる主觀は、精到、一毫も疎にせざる描寫と相待ちて、渾然また森然たる趣をなす。幾波瀾、幾情景、凡そ人間の悲喜哀歡は集りて悉く此裡に在る也。

綠蔭叢書四編  
**微風**

第二版  
紙數六百頁  
定價七十五錢  
郵送料八錢

熱き地の息に混じて涼しき微風は通ひ来る。斯くも複雑無條理にして矛盾に満たされたる、殆んど名狀し難き生涯は作者をして本書の創作に筆を執らしめたりと云ふ。收むる所『食後』以降最近の作。短篇の集なりと雖も、中に某夫人に與へたる『幼き日』の如く、百三十頁を超えたるものあり。

徳田秋聲氏作

▼小形總洋布製美本  
**徴**

第七版  
價五拾五錢  
郵送料四錢

明治年間に發達せる自然派藝術の最頂點に達したるものは、實に此の一篇なり。此一篇は、ひとり秋聲氏一代の傑作なるのみならず、明治文壇の主流が深く湛えて淵をなせるものとして、實に新文壇の代表的産物なり。

▼小形總洋布製美本  
第二版  
價五拾五錢  
郵送料四錢

**足迹**

▼小形總洋布製美本  
新刊  
定價五拾錢  
郵送料四錢

本書は『徴』の前編とも稱すべきものにして、早稲田文學記者は、實に於いて自然性を、形に於いて客觀性を十分に具有した、眞に充實した作品として、明治文壇稀有の大作たることを斷言するに憚らない、と激稱せられたり。

**爛**

遊女あがりの年増と、其縁續きの女學生と、其の夫なる淫蕩の一紳士とを主要なる人物として紛糾錯綜せる性慾生活を描けるもの。紅飛び緑亂るゝ人生を寫すに、作者一流の嚴肅沈痛なる主觀を以てせる氏獨特の傑作也。

小 説 集  
**誓 言**

田村俊子著

小形天金最美本  
定價六拾六錢  
郵送料六錢

小 説 集  
**廢 墟**

小川未明氏著

特定價七拾八錢  
最廉價七拾八錢  
美觀價八拾錢

ニイチエ著 森鷗外氏譯 生田長江氏譯

# ツアラトウストラ

(版三)

- ▼ 總洋布天金函入美本
- ▼ 定價 金貳圓參拾錢
- ▼ 小包料 金拾 貳錢

本書はニイチエ一代の心血を凝ぎたる代表的作品を以て見るべきものにして、彼の深刻にして激烈悲壯なる詩歌や哲學や宗教や悉く收めて其中に在り。之を譯するは即ち此の文豪の一切を傳ふるものにして、且つ此文豪を通じて複雑なる近代思想其のものの精髓を傳ふる所以也。譯文の莊重森嚴なるは、世既に定評あり。

アーサー・シモンズ著 岩野泡鳴氏譯

# 表象派の文學運動

(版新)

- ▼ 總洋布天金最美本
- ▼ 定價 金 壹圓
- ▼ 郵送料 金 八錢

エルレンを中心として初期アカダンの諸詩人生活より、神祕派のメテルリンクに至る、佛蘭西表象主義の文學的、哲學的、宗教的運動を評論せるもの。我が國に於ても、新思想界有識者の虎の巻となせる書也。今泡鳴氏が異常なる苦心によりて、邦譯を公にするを得たり。卷末、周到なる索引を附す。

# 相馬御黎明期の文學

(版再)

- ▼ 特製金文字入美本
- ▼ 定價 金八拾五錢
- ▼ 小包料 金 八錢

宗教の權威地に墜ち、教育の効果日に擧らざる今の時代に於いて、文學のみ獨りよく人心の奥底を化す。新らしき文學の研究は、同時に新らしき生活の研究也。新生活の熱烈なる要求を根底として新文學を研究せる此書は、蓋し最も刮目すべき時代の烽火たらずんばあるべからず、新らしき生活の曙に憧るゝ人に之を捧ぐ。

